來りて熊野に來住し紙をも漉きて用けるなり、今にいたりて此邊一二ケ村皆ひ傳へて漉申候、則ち名も徐福紙と申、思ふに唐紙製にや、破れ紙に必ず横に裂けて候なりと語りわ、この徐福の事もまことにさもありけん、新宮の濱邊にその墳ありて田の中に殘りまた神にも祝たるにや小社も飛鳥宮の傍にあり

○五言絶句の詩　南谿瑩堂の石壁に題しける詩に云、

贈去徐仙子、深入前秦壑、借問超遠趣、千古誰似君

○庾淵　夕暮のこと、准南子に云、日入レ於二庾淵一是爲二黄昏一、三輔舊事に云、日出二於谷一浴レ於二咸池一至レ於二庾淵一即暮

# 陽氣

火は誠に陽氣の本體にして賑なるものなり。余かつて肥後の深山を分通れる頃、前後五七里がほどは人家絶はてゝ、木こりの道もいと細く、落葉降敷谷陰をうち打過つゝ、小高き嶺に頭をめぐらせば、日もはや庾淵に沈みて、黄昏告る鐘もなく、四方の眺蒼茫として峯の松風のみ物凄きに、其色は見えねども狼の足跡おびたゞしくありて、今も出べく覺ゆるに、猶行先は程遠く、道さへ覺束なくて、事とはんにも、我身ならで誰答ふるものもなし。ぅゃろに心細く成り來て、我家に在りて晩に着飽まで食し、透間の風もいとへるを、行衛定めぬ遠方に行勞れるも旅好るひか心よりとはしりながら、今猥に失はれんも計がたしと思へば、いとはかなくきねも入ぬべく覺えて、たゝずみしが、あたりの芝いとよく枯赤みたれば、ふと心付て火打取出して、其芝に火を放ちたるに、山風とにはげしくて、炎四方にもへ上れば、今迄淋しく詫びしかりつるが、此陽氣に心ひらけ、げん氣勃然とおこり、何となくたのしくて、腰に付たる握りめし取出てあぶりくひ、小唄謳ひつゝ夜をかけて、恙なく山を下りぬ。げに大陽東に登り晝と成て、諸々の惡邪妖怪皆隱伏、大陽西にいりて夜陰の分にいたれば、山河草木にいたるまで其氣皆おさまりしづまりて、妖魔はしいまゝに起る、今山を燒て陽氣を得、猛獸の害をまぬがれしも、其ゆへなきにもあらざりし。

# 濁り酒

九州の邊地には濁り酒とて、京都の甘酒のごとくにして、其色薄黒く、其味辛く酸きものあり、下賤のものは大方これを飲なり。味は咽をも通りがたきほどにて、甚だ強く、醉ふものなり。常の酒を清酒といふ、斯る清酒、濁り酒、唐土にも有と聞及ぶ、其類ならんか。薩州には燒酒とて琉球の泡盛やうの酒あり。京都の燒酒のやうに強からず、國中七八分は皆此燒酒にて酒宴する事なり。常の酒は祝儀事などの、贈りもの、あるひは儀式の宴會などにのみ用ゆ。是は皆京大阪邊より積下す酒にて、其價尤高直なり。彼國にてたま〳〵造る酒は甚下品にして飲難し。夫ゆへに此燒酒を多く用ゆる事なり。琉球芋も酒に造る、味甚美なり。其外民家にては黍粟稗の類も皆燒酒に造るよしなり。余も其法を傳へ、彼地にて其道具を求め歸りて、今にいたり折〳〵は我家の飲料を造る。其時々三升にても五

○北窓瑣談に云、清酒の今の如くになりしは纔に古四五十年此かた、今そのもの事さそ、今より古は皆邊地は西國の唐土なりと、濁酒多しと聞く、殊に日本は米穀萬國に勝れ、濁酒も一情實なれは醉事も入味厚く、醉事長崎へ渡り來る唐人の甚しといふ、彼國にて人に勝れたる上戸も此國へ渡りては彼國の三分一も飲得す酩酊すといふ

○濁酒　肥前國島原の人語りて云、今も九州には濁酒を欲む、但し賤しき者に多し、粟を以て造り味酸しとなり

升にても入用ほとつゝ造る事なれは、甚だ自由にて、且又風流のものなれは大に賓客を酬應に足る、他國に此法なきはいか成ゆへにや。又西國にて酒の賣買壹升二升とはいはず、一は○○いと二は○○いとて賣る事なり。其一はいと言もの大抵四合二三夕ばかりなり。球摩郡なぞは酒下直にして、一杯の價錢八九文より十二三文程なり。此所は格別下直の地なり。薩摩は余はぜ高直なり、一はい二はいの名は琉球までも皆斯のごとしとなり。阿蘭陀までも又斯のごとくなるや、渡り來るフラスコ、丸きは壹杯入、角なるは三盃入、唐日本なぞの一升二升にては其器相應せざるやうに見ゆ。

○一ばい二はい　九州にて今も此稱あり、加州金澤にもあり、一ばいとは二合五勺なり、其地には二合五勺升といふものあり

## 姥ケ嶽

○姥ケ嶽は豐後の國竹田の城下南四里にあり。山の色黒く雜樹生ひ茂り、拔群に秀て大なる山なり。此上には昔大蛇ありて人に交り子を生し、其子成長して後尾形三郎維義と名のり、九州にて威を振ひし事世のしる所なり。れだ巻に針を付てしのひ來りし男の行衛を尋ね、此姥が嶽の窟に入て大蛇成りし事を知りたりし事、むかし物語にて唯うはのそらに聞居りし事なりしが、此あたりにて聞けは、近年の大洪水に大蛇の住たりしといふ穴崩れて、其中より大なる蛇の頭の枯骨出たりしを、人々恐れて本社の神體とあがめたりとそ。むかし物語も跡かたなき事にもあらすや。余も幸ひの事なれは此嶽の絶頂にのぼりみばやとおもひ、竹田にいたり、一宿して姥が嶽への案内を頼しに、所の人いふは今年は格別の凶年饑饉ゆへ、此邊盜賊夥敷おこりて、殊に姥が嶽邊は山中にて人家もなく强盜の類甚た多しとの風聞なれば、他國の人の徘徊し給ふべき所にあらす、强て行給はゝ極めて變事あらん、此所の者たに恐れて、近き頃は彼邊へ往來する人も稀なりと、ひたすら留るにそ、余も心細く、こゝに此頃道中筋にてかしこに切取あり、爰には旅人を鐵砲にて打たりしなと、日々夜々に聞て明白なる街道さへ覺束なきやうに、皆人殊に言はやし、余なぞか遊歷をも留る人のみなる折からなりしかは、うゝろに心おくれて、姥ケ嶽には得登らずやみぬ。其近きあたりまでたづね入しに、今にいたりては殘り多し。

○お多巻に云々　この話平家物語巻入に見ゆ

○今年　二年なるべし　ことは天明

## 牛

薩摩鹿野谷といふ所には牛合といふ遊びあり、上方の鷄合のごとし、牛を雙方



## 合

○姥ケ嶽　一に祖母ケ嶽と書けり、豐後日向の白杵、豐後の大野の二郡に跨り、高サ五千八百五十尺あり

○竹田は豐後國直入郡に屬す、岡と稱す、中川氏の舊藩地なり

# 牛合（あそ）

○伊豫國宇和郡吉田、宇和島、御庄郷等には古來鬪牛戯盛に行はれしが、明治初年に至りこれを禁せしに、近年に至りまたこれを公許せしかば盛に行はる

○かずね　山慈姑の根なるべし、肥前にては今もそれを以て餅を製り「かずね」餅と稱す

○ゑぐみ　苦辣の味なり

より出して戰はしめて見物する事なり。甚だ猛勢なるものなり。よくつき合ふものとぞ、もし退そかずして難義に及ぶ時は、竹箒を其中に入るれは、忽ち左右へわかれ離る。外のものにて分んとすれば、いよ〳〵勢ひ付き、多く疵付死する事もあり。斯猛勢なるものといへども、只眼を用心する事甚だし。竹箒の和らかなるが目のあたりにさへぎれは、力業にあらそひかたく、引退くとぞ。是も上方には珍らしき遊ひなり。唐土には鬪牛とて牛を突合せて遊ぶ事見へたり。唐近き國なれば其風なりけらし。

## 饑饉

近年打つゞき五穀凶作なりし上、天明二年寅の秋は四國九州の邊境饑饉にて人民の難澁いふはかりなりし。余などか旅行も道路盜賊の恐れありて、冬深き頃などは所々逗留して用心せり。さて春になりても諸國とも米穀ます〳〵高直に成り、余なと途中白米一舛大かた百四十文ばかりを出して求たり。國〳〵城下までも多くは麥飯、粟飯、琉球芋、大根飯の類を食し、取つゞきたり。村々在々はかずねといひて葛の根を山に入りて堀食ひしが、是も暫くの間に皆ほりつくし、金槌といふものをほりて食せり。是もすくなく成りぬれば、すみらといふものをほりて、其根を食せり。葛の根、金槌の類は其根をつきくだき水にさらし、夫をだんごに作りて鹽煮にして食せり。春のころにいたりては鹽もけしからず、高直に成しかば、これをも求めかねて、海邊に出て潮を汲來りて、其潮にて右の金槌團子を煮て食す。すみらといふものは水仙に似たる草なり、其根を多く取あつめ鍋に入、三日三夜ほど水を替、煮て食す、久しく煮ざれは、えぐみありて食しがたく、三日ほど煮れば至極柔らかに成、少し甘味も有樣なれど其中にゑぐみ殘れり。余も食しみるに初め一つはよく、二つめには口中一はいになりて咽に下りがたく、はや三つとは食しがたきものなり。されど食盡ぬれば皆〳〵やう〳〵に是を食して命をつなぐ、哀れ成事筆に書盡すべきに非ず、余一日行勞れて、中にも大に奇麗なる百姓の家に入て、しばらく休息せしに、年老たる婆一人なり。いかゞして人のすくなきやと尋ぬれば、父子嫁娘皆今朝七つ時よりすみら堀に參れりといふ。夫ははやき行やふなりといへば、此所より八里山奥に入らざれば、すみらなし、淺き山は既に皆ほりつくして、食すべき草は一本もさむらはず、八里餘も極難所の山を分入り、すみらをほりて此所へ歸れば、都合

十六里の山道なり、歸りも夜の四ッならでは得歸り着ず、朝七ッも猶遲し、其上近き頃は皆〳〵空腹がちなれば、力もなくて道もあゆみ得ずといふ。其すみらいかはゞ取來るといへば、家内二日の食に足らずといふ。さても朝の夜るより暮の夜まで十六里の難所を通ひ、三日三夜煮て漸〳〵に咽に下りかぬるものをはり來りて、露の命をつなぐ事哀れといふも更なり、中にも大なる家だに斯のごとし、ましていはんや貧民のしかも老人小兒又は後家やもめなどはいかゞして命をつなぐ事やらんと思ひやれば、むねふさがる。又或時一人の六十六部に行つれしに、此六部涙を流して余に語れるには、此間山中に行暮て、とある民家に入て宿りを求めしに、老人娘と二人居たりしが、宿をゆるさず、強て乞しかば食物なしといふ、米はこなたに貯へたりといふて、強て内に入たるに、二人ともにいとちからなく久敷病るやうなれば、いかゞし給ふやとふに、二人とも涙を流し、近きほどは一かうに食せず、女房は十日ばかり以前既に餓死せり、悴も四五日前にうへにつかれ死せり、親なりといふ我等に少しつゝ食をあたへくれしゆへ今までは生のびぬといふに、興さめて驚き、さても哀れなる事を承はるかな、嘸かし苦しく候はん、先此焼たる食をしよくし給へと出せるに、老人と娘互に譲り合ふて食せず、いかなる故に此場にいたりてゆづり合給ふや、これにてたらずば、猶此袋に一升ばかりは貯へも候へば、二人ともに心置ず、食し給へと強たりしに、老人のいふやうは御志は忘れがたく恭く候へども、今宵此飯をたべ候ひても明日よりの食物あし、さすればなまじいに食して苦しみを永くする道理なり、たゞ一日もはやく死行ん事こそ今日の望なり、娘はまだ年若き身なれば明日にもせよ、万々一殿様より御惠の事にてもあらば、命たすかる事もや有べき、少しにても食し、一日にても活のびよかし、老人ははや思ひ殘す事もなし、女房悴のはやく死行し事こそ羨ましう候へとて、更に兩人ともに食する氣色も見えず、見るに聞に哀れまさり、飯くふべくもおぼへず、強ていひなぐさめ、むすめに飯少し喰せ、猶袋に殘り有し用意の米を與へて立出たり、多年廻國修行いたし候へども、つひに斯まで哀れなる事にはゆき逢ひ申さゞりしと語れり。誠に甚敷事どもなり。これらのことをれもへば、常に白米を飽までに食して、猶汁菜の事に奢りを極むるは冥加をもしらざるものといふべし。○卯の年斯のごとく、猶京へのぼりて後、辰の年春夏殊更きさん甚敷、東國なぞ別して哀れなる事多しといへり。余は西國にて目のあたり見及びし事なれば、一入に

○卯の年は天明三年なり
○辰の年は翌四年なり

歎かしく思ひやれり。夫に付ても一國の君少し慈悲の心おはしまさば、其恩澤忽ち下にうるはひて、哀れある際には及ばざるべきや。

## 隱戸の瀬戸

安藝の國○○○の瀬戸といふ海あり。此所は國の南の山遙に突出て、六七里海上に出たり。其山の陸地に連る所甚だ細ければ、海へ出たる所程を山をはり窟て切り通ふして、舟のかよふ海路を新に造りしなり。此所人力を以て切明たりしことなれば、南方の岸せまり居て、其間の潮行甚急にして、舟人の恐るゝ所なり。何人の切通せし事にやと尋るに、むかし平清盛、安藝守にて此國に居給ひし時、舟にて毎度往來に此所に至り、出崎の山にさへられて、遙の南の方へ廻りて十里餘も海路遠くなれば、此所を通り給ふ度毎にいかりて、此出崎の山を切通し、舟を眞直に遣るべしと下知し給ふ。人皆此事を人力の及ぶ所にあらざるべしと恐れしかども、清盛の下知やみがたくて、數万人の力を以て、終に陸路に連る所を斷切て、舟の通ふ海を造りなせり。其後は數百年の後も其恩をかふむりて上り下りの舟路近く行事を得るなりとぞ。余兵庫に遊びし時に○○島を見て、清盛の志の大にして豪邁なる事を感じ歎きしが、又此事を聞て一世に威をふるひ給ひしも其故なきにあらざりしと、其世の事までを思ひやりし。又藝州の陸地を通りし時、大道のつくりやうを見るに、他の國とは違ひて、多くは眞直に作りたり。元來山國なれば直には付がたき道を、山に登り谷に下りて、無理に近道に作りなせり。余かねて聞居しは、日本の道路は、其始大かた行基菩薩の差圖なりといふ事なりしが、いづれの國の道も、山あれば其裾を通りまはりて、谷をつたひ行き、なるたけは山坂を登りくだらず、平坦の所をかよふ樣に付たるものなり。只藝州に成てはまはり道なく、大方直に行やうに、山谷も厭はず、登り下りて道は付たり。他の國の道をひらける心とは格別のやうにみゆれば、これかならず平相國清盛の改め給ひしか、又ちかき頃の○○島正則か、何れ豪雄の氣象の人のなす事なるべしとれもひしが、其後、此隱戸の瀬戸の事を聞て、彼陸地も平相國の手なるべしと思ひし。

## 鍛冶祐定

余諸國に遊ぶに、何に寄らず才藝勝れたる方には必尋て其論說を聞、醫術の心



○隱戸の瀬戸は安藝國安藝郡の西の端と瀬戸島との間にあり、長六町、距離一里二丁三十間あり。○藝藩通志に云、安藝郡の條に云、於牟登迫門（平清盛塔附）瀬戸島と警固屋村との間にあり、相傳ふ、平相國のきりぬれしと、相國嚴島神を崇信してしば〳〵往來す、故に此迫門を鑿て舟路の便すとぞ。さもあるべきか、迫門の口に石なたみたり、世に相國の塚といふ、凡高六尺、一尺六寸、おもふに、これ迫門成る時に、經石を擦みて鎭護としなるべし、或は云、相國統し、鑿してより國民其利を受る大かたならず、故に塔婆を建て其恩德を報ずと、因て御塔の道

門と號す、今隱戸と書くは誤なり、又は隱れたる門と云義ともいへり、按に相國開鑿の事、國史に見へず、されど此迫門と東にあたる警固屋村とは、なべてこゝなり、島の平村と稱す、是開鑿の時食糧を置し地にて食小屋（けごや）の說もあり、且此地の形勢を見るに自然の潮路とも見へず、山を鑿しにやとおもはるゝ、源貞世、鹿苑院殿島詣記にもしどの濱のせとといふは、瀨のごとくにやくしもおしもさされしかど、手もたゆく、こぐめりなどいへり、信に然り、漁家海に臨み、藩侯遊息の亭、土藥菜が五勝梗なといふもありて景勝の地なり○北窓瑣談に云、平相國清盛小松内府公に命し、近江の琵琶湖を北海に開んとし、新田を切落し、敦賀へ越る

得にせるに、備前にては名高き長船の里に入りて、長光、祐定などいふ鍛冶の家を問ふ。其刀劒を鍛ふを見るに、他國の鍛冶に異りて、石を以て鐵を鍛ふ。何れの家も皆繁昌して賑なり。彼石にて鍛ふ故にや、又は水土の故にや、又は傳來の良法あるゆゑにや、備前物は打見るより他國の作に異りて別段に見ゆ。今の祐定なども、初は格別の聞へも無りしが、後に薩州の奥の元平に從ひ學び、伊勢守祐平と銘して、殊に見事にて世上に珍重す。己が家の名高きを藝道の爲に屈して、二三百里の遠路をいとはず、師に從ひて上達を求む、誠に殊勝の志なり。近來丹波守吉道も伊豫に行て國輝に學べりと云、誠に修行はかくのごとく有たきものなり。己が家にのみ誇拙き才藝を以て下問を恥、一生下手の名を取るは愚の至りなり。醫たる者など殊に心得べき事なり。近來此外にも京以西の鍛冶夥敷聞ゆるに、余が遊ひし道筋にては薩摩の正良、同國元平、大隅の貞宗、肥前の忠義、伊豫の國輝、播磨の氏繁などを數ふるにいとまあらず、就中正良、元平などは世上に名高し。正良は俗稱を伊知地平角といふ。余も彼國にて親しく交り、別るゝ時小刀を打て贈らる。相州物の風あり。又近年因幡の壽格、上手の聞へありて東武に撰ばる。都て武刀は慥にて實用に勝れりとて、近き頃は人々別て珍重するより自然に價も貴く成り、鍛ひも念に入るより國々上手多く出る事にこそ。

道中鞆津の山中彈坂といふ所に其切開きありしあと
今に殘れり
○築島は鞆津國輪田の泊に築ける島なり、一に經島ともいへり、今の和田岬これなり、八部郡に屬す
○福島正則は安藝に封せられたれは
○長船は備前國邑久郡に屬す
○國長は長船と稱し光忠の子に
○光忠は備前國長船里に住す
○祐定は横山氏、世々備前國長船里に住す
○正眞
南翁詩集に云
壬寅秋余客薩州、客舍南隣偶有圍碁者、問其姓名高、工正眞所作也、正眞者鍛本府名、因賦之、余固相識、倣白香山意贈一律
一刀新出砥、銳利殺氣侵風雪、鐵魂斗牛此甲州、威振三尺寶、應有萬金酬、願爲忠貞客、



# 西遊記續篇卷之三終

# 西遊記續篇卷之四

## 那智の瀑布

○那智瀧は紀伊國東牟婁郡那智山中にあり、三所に下れり、一の瀑は高八十餘丈、幅十八間、二の瀑はこれか上四町にありて高十丈八尺、幅三十間、三の瀑はこれか上五町餘にありて高七丈八尺、幅三間とす、下流那智川となりて海に注く

余年久敷那智山の瀧を見まほしく心がけ居たりしが、漸〳〵近き頃彼地に遊びて心よく一見せり。誠に天下無雙目を驚す瀧なり。其瀧のあたり山のたゝずまひより堂宇の設、樹木の生ひやうまで、他山には勝れて神仙の境界といふべし。此瀧の事は幼き時より聞居て、かやうにも有べしと思ひしには似もよらず、格別に異なり。初に思ひ居しは、ふところのやうに山の抱へたる所に、巖石峨々と聳へ、其中に大河を切落したるやうに、水逆まき落て、水煙一二町にも飛ちり、雨の降ごとく一山鳴響き、其音遠く卅町、五十町の所までも聞ゆべし、其瀧の全體の趣を譬へ云はゞ、力士の荒れたるがごとく怖ろしくて、目留て久敷は見事もなるまし、余がごとき虚弱の者は神氣も遠々敷なるべしと思ひ居しに、左はなくて瀧の全體の趣をたとへいばゞ、美人の薄衣を着て立たるごときものなり。瀧の落る所は一枚の岩にて壁を作りたるがごとき所なり。其石壁の横の廣さ、

○文覺荒行　平家物語、源平盛衰記に見ゆ

○大隅國の瀧　こゝには正編卷三に見えたる龍門の瀑のことなるべし

○廬山の瀧　李白の望廬山瀑布の詩に云、西登香爐峯、南見瀑布水、排流三千丈、噴壑數十里、如飛電來、隱若白虹起、又云、日照香生紫煙、遙看瀑鑪布挂長川、飛流直下三千尺、疑是銀河落九天○潛確類書廬山の條に「瀑布尤甲天下」とあり

五丁も十丁もあり、但し遠方よりは此石壁、樹木の梢に出て全く見ゆれども、近く寄りて瀧みるあたりにては、兩方に程よく大木の杉多く有りて、石壁の横廣くはみへず、空はまことに天より落る心地すれども、水の幅は殊の外に狹く、大抵幅一間ばかりにみゆれども、廣く高き所なれば實は二三間もあるべし。高きは直下五六十間と見ゆ。上の方暫くは水筋通りてみゆれども、それより下にては石面に水碎け、色白く霧のごとくに散りて、其見事いひつくすべからず。下には大石多く有りて、瀧壺といふべき淵はなし。其音も格別甚しからず、瀧近くよりても神氣の遠〳〵敷なるやうにはあらず、文覺上人の荒行も空言にはあらじと見ゆ。皆人の高さは二百間、幅は三十間などいふは、ぎやうさんに實をうしなふていへるなるべし。此瀧のみに限らず、都てのもの賞美に過て實を失ふこと多しとぞ覺ゆ。されど余も京の大佛を大なりと聞居、越中の立山を高しと聞居たりしが、初て大佛を拜し立山を望みたりし時に、さみの大なりとも高しとも思はざりしに、日をへて見るたびに大に成り、高く成しがごとく、此瀧もいく度も見ば高くも廣くもなるべきにや、瀧の幅の廣きばかりを論ぜは、大隅國の瀧などは是よりも廣けれども、那智は全體の奇にして美なる事、言語に絶せり。

○常清瀑は備後國三次郡下作木にあり、三層に落つ、上を荒波といひ、高十二丈、中層を白絲といひて高二十三丈、下層を玉水といひて高七丈、共に幅六間二尺なり、下流作木川となる

○熊野瀑は備後國奴可郡入江にあり、高六十五丈、幅一間、下流尺田川となる

○南村の瀑　雌雄瀑と云ふ、雄瀑高五丈、雌瀑高三丈、幅各四間、櫃田川に入る

○會津の瀧　岩代國會津郡の中には大いなる瀧多し、何れをいふにや、鹽澤村の奥に馬尾瀧あり、高廿丈、幅二間、檜枝岐村の奥、只見川の上流に三條瀑あり、高廿丈幅七間、一に不動瀧といふ、原村の山中に波瀧あり、高十五丈、幅六間、瀧原村に大瀑あり、其他少からず

唐土の盧山の瀧よりも遙に勝れりといひ傳ふるも、實にさも有べきやと思はる。又近き頃備後の國より申こせしは、彼國三次郡布野の西三里ばかりに、常清が瀧、一名を作木の瀧といへる有て、高四十二丈といふ、又同國奴可郡西城の北三里ばかりに、尺田といふ所有、其山に熊野の瀧、一名那智のたきといふは、高六十余丈有りといふ、又同國惠蘇郡南村に南村の瀧とて高十丈、高八丈の瀧二つありといふ、又同國門平村に高五六十丈の瀧有りとなり。此事慥なる便りに申來れども、余いまだ見ざれば知らず。一國の中にかくのごとく瀧多くある事おほくは聞ざる事なり。まのあたり見たりせば實にかくありなんや、いかゞあらん。奥州會津の山奥に大なる瀧多く有りといひし人もあり。是れは極深山のことなれば、人知らぬ瀧も有りやせん。されど何國にもあれ、那智より大ならば世に聞へずや有べきと思はる。

## 桂林

桂は藥物の上品にて肉桂、桂枝、桂心、桂實などゝて唐土より渡るものなり。日本にはなし、其種類あれども、香氣薄く辛み少く、藥用に入がたし。唐にも南方暖國ならでは生じがたきゆへ、交趾、東京などいふ地より出るを上品とす。然るに近來は唐土より來るものも上品少きゆへ、和產の桂を多く取用ゆ。藥種屋にて薩摩桂といふものよほどよく見ゆ。誠に薩摩、土佐抔は極南方なれば桂も生ずべし。又近き頃熊野の雄鷲といふ所の山に桂數千株を植付たりといふ。雄鷲など別して暖氣の地なれば繁茂疑ひ有べからず。數十年の後には何卒して和產の桂多きやうにあらせたきものなり。熊野などに植しことは國益はもとより海内のためといふべし。巴豆、檳榔子の類も暖國をゑらみて植たきものなり。

○和產の桂　例之は土佐桂の如きは支那桂及錫蘭桂に類すれども其揮發油の成分を異にせり

○紀伊國那賀郡麻生津村より一里許にして桂谷といふ處に雌桂雄桂の二木ありて有名なる者なり

○過し年　安永八年十月朔日のことなり

○櫻島は薩州領にして薩州櫻島と通稱すれども實は大隅國北大隅郡に屬す

○薩日隅地理纂考に云、(新島)向面村の前にあり、其島凡そ五ありしか、次々に合併して今は一島となる安永八年巳亥十月朔日櫻島火を發し地大に震ひ黑煙天を覆ひ忽ち暗夜の如し、五日經て後

## 出來島

過し年、薩州櫻島大燒の後、其海中時〳〵沸騰して海水煮へあがり、海面に火もへ出て、大海の水皆熱湯と成り、海中の魚類大小の差別なく皆死せり。其海の沸騰する勢に百尋に餘れる海底より土砂沸上り、新に七つの島を生せり。第一に大なるは一里七合廻り、其外一里成、或は一里など大小色〳〵あり。其後海中煮へしづまりて彼島堅まり、國土と成れり。余が彼地に遊びし頃は、彼島出來て、やう〳〵四五年にもや成らん、ほどちかき事なれば、島の上に草木もなく、唯白砂

の島なりき。其あたりの人の物語れるは、近き頃は鳥多く島に付り、鳥付けば草生ず、草生ずれば樹木も追々に生ず、樹木生すれば水湧く、水あれば人民の居住も出來て、耕作の事もなれるといひし。其後京に歸り、年過て、彼國の人の登り來れるに聞けば、近年は樹木も多く生ひ茂り、潔白の水湧て、人も住るゝやうに成りぬれば、隅州より新島に宮居を建て、宮守を置、參詣の人もありといへり。いと早きものなり。其天地の中に國土を生せし事を、まのあたり見たることも不思議あまりあり。此日本國なども神代のむかし湧出たるなどいふ物がたりは、只うはのそらに聞て、まことともも覺へず有けるが、かゝる事をまのあたりみれば、空言にてはあらざりしと思はる。もと櫻島も養老二年此海大にもへて天地晦冥し、一夜の間に七里餘廻りの高山湧出て、さくら島と名付し事とぞ。櫻島は比叡山よりも遙に高く大なるに、人民多く、田畑豊饒にして繁昌の島なり。又櫻島の外に二つの小島あり、　と名付く。此島は文治年中に出來たりといひ傳ふ。これらの事唐土人などに聞しめば、空ごとにて只怪談のやうに思ひ信ずべからさる事なれど、廣く世界の事を聞けば、阿蘭陀より日本へ來る海中には、日本より廣き一大國、過し年海中にくぼみ入りて、今にては只其國のあ

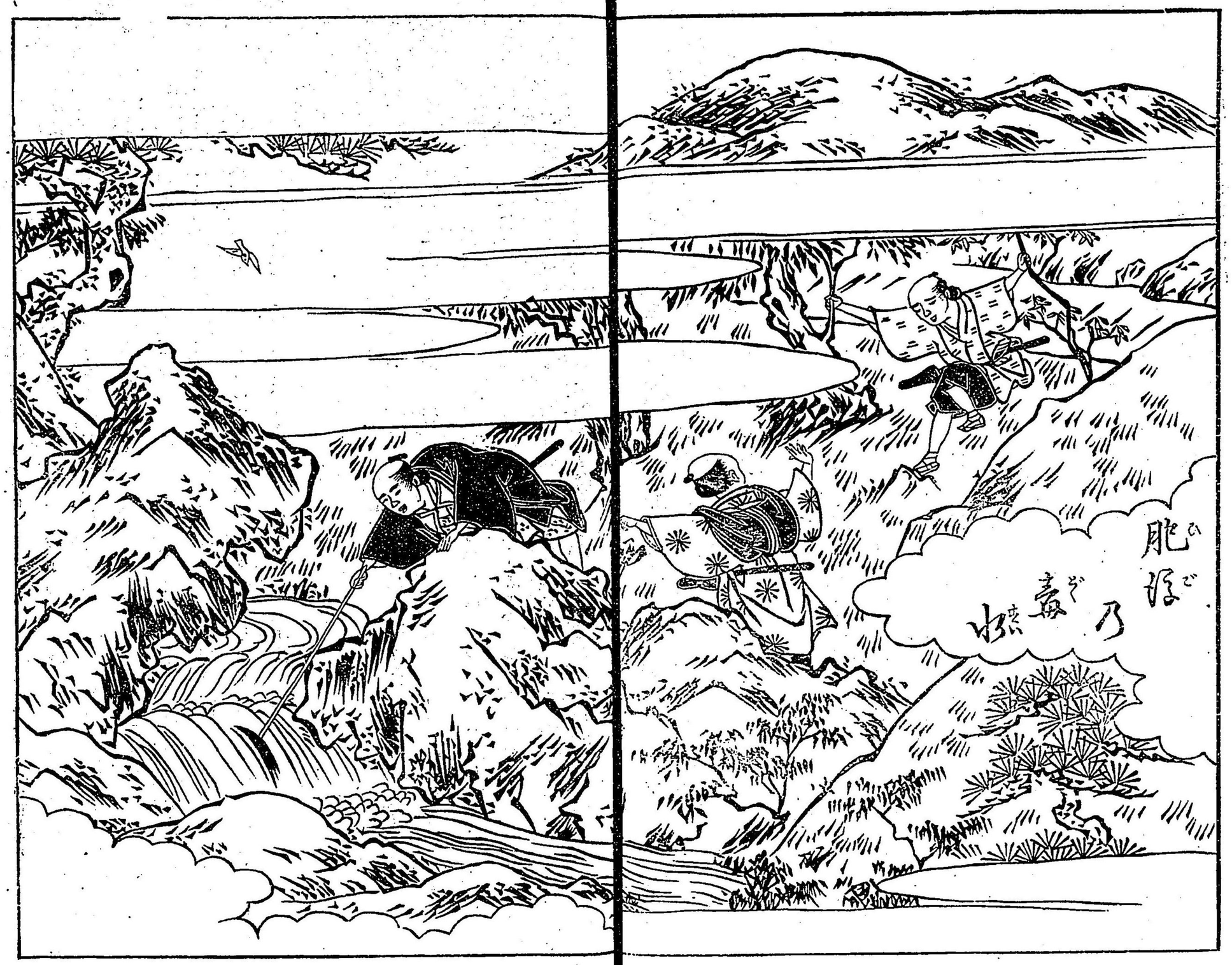
標消え天晴る、十四日一島湧出す、翌年七月朔日水中に沒す、是を一番島といふ、同十五日又一島湧出す、是を二番島と云、俗に猪子島と稱す、巳亥十月化生の故なり、同十一月六日夜又一島湧出す、是を三番島と云、同十二月九日夜又一島湧出す、是を四番島と云、三四の兩島は硫黃の氣あり、因て俗に硫黃島と稱す、同九年庚子四月八日二島相並ひ又湧出す、五月朔日に至て自ら合して一島となる、是を五番島と云、今俗に安永島と稱す、同六月十一日又一島湧出す、是を六番島と云、同九月二日又一島湧出す、是を七番島と云、同十月十三日又一島湧出す、是を八番島と云、後七八の兩島合して一島となり、又其後六番島に連り三島合して一島となれり、因て併せ稱して六番島と

云、漁人釣を垂るゝに魚を得ること多く、俗に惡美須島と名く、初め火を發せしより一年の際海底鑄冶の如き音ありて海潮沸騰し、砂を飛せ泥を雨らし、或は石を發し、或は三日を經、或は五日を過き出沒常ふし、巨岩崩れて細石と變し泥沙聚りて洲嶼に化し其狀定ることなし、其一島涌出する時は必泥沙洑き上て山の如く其高さ三四丈に至り倒れて海水人家に逼る、炎氣稍退き五島全く其形を成す、即ち其二番三番四番五番六番廿五島併せて新島と名つく、其中五番島最大きにして其周廻二十町高さ六丈なり、草木發生し水泉迸出す、於是寛政十二年閏四月島民六口を此島に移す、今向面の海底を測るに深きこと凡そ八十尋、若くは九十尋あり、かゝる海底より湧出せること造化の功用眞に不

りし高山の巓ばかりにて、海面に出沒せりといふ。新に島の生ずることもあれば、又國の沈み入る事も有べし。何事も小智にては、はかりしるべからず。

## 肥後の毒水

肥後の國ヲクニといふ所は、深山にて豊後に隣る地なりといふ。いろ〳〵珍敷事も多しときけば、余も其地に遊ばんことを欲せしかども、道の都合あしくてやみぬ。村井氏の語られしは、此尾國の近きかたはらに毒水あり。少き谷川の流れなり。諸の禽獸此流れを飲ば即死す。鳥獸の枯骨數多、此傍に有とぞ。然るに人には曾て毒せず。此ながれの下に村里も有て、人皆汲て用ゆれども終に毒にあたれる者なし、犬もまた死せずとぞ。都て常に鹽氣のものを喰ものには、此水の毒あたらず。村井氏も自ら行て試みられしに、何の奇妙もなかりしとぞ。いと珍敷事なり。然れども知る人稀なり。那須野の殺生石などは、殊に名高きに斯の如く世に顯るゝと、顯はれざるとの幸不幸は有けり。高野山の玉川の水は世に毒水といへども、これは實の毒水にてはなきといふ。其外、余も諸國に遊びしかども、いまだ毒ある水を見ず。都て毒は皆な極熱のものゆへに、たとへ何の毒に當れ


肥浮乃
嘉水

るにも冷水を呑ば必ず解す。其故に冷水の中に毒の生ずる事はいたつて珍敷事なり。行て見ざりつるは今に殘り多き事なり。其他、尾國には半田の瀧とて大なる瀧も有といふ。又鏡の池といふありて、池の中に時々鏡みゆるよし。二つ見ゆるときも有り、三つ見ゆる時もあり、又日によりて太刀の見ゆるときもありとて、神變不思議なりといひ傳ふ。又此地の大庄屋は源の賴光の子孫なりとて、賴光大江山入りの時の笈を所持せらるゝよしなり。肥後の人々これらの事を語りしに、一しほに見おとせし事こそ、殘り多けれ。

## 豆腐の怪

薩州今泉といふ所に、或朝此辻、彼門いづれの町々にも豆腐夥敷有て、或ひは十丁、二十丁づゝうづ高く街道に捨たり。其數凡數百丁の豆腐なり。始めのほどは人も我門にのみと思ひて、いかなるものゝいたつら事なせしなと、つふやきしか、後にはこゝにもかしこにもと言騷くより、けしからぬ事なりとあやしみいぶかりて、狐狸の人を迷はすにやと忌怖れて、手をふるゝ人もおかりしが、晝になり暮に成ても何事も無き豆腐にて、外に疑はしき事もなかりしかば、家々に取入て打喰ひけれど、何のたゝりもあらざりし。其後近郷の豆腐屋などもたづね試しに、其日格別に多く賣たる家もなし、何れの所より聚り來り、何の譯といふ事終にしれず、怪しかりし事なりと、今泉の人余にかたられし。

## 高麗の子孫

薩州鹿兒島城下より七里西の方ノシロコといふ所は、一鄕皆高麗人なり。往昔太閤秀吉朝鮮國御征伐の時、此國の○○○の先君、彼國の一鄕の男女老若とりことなして歸り給ひ、薩州にて彼朝鮮のものどもに一鄕の土地を賜ひ、永く此國に住せしめ給ふ。今に至り其子孫打つゞき、朝鮮の風俗の儘にして衣服言語も皆朝鮮人にて、日を追て繁茂し、數百家となれり。初めとらはれ來りし姓氏十七氏、所謂伸、李、朴、卞、林、鄭、車、姜、陳、崔、盧、沈、金、白、丁、何、朱なり。余久敷其地に遊ばん事を心がけ居たりしが、元來異國の種類、其上旅宿すべき定りの宿もなければ、便りなくて行ん事もおしかるべしと、人々の諫めによりて遊ぶ折もかなと見合せ有しに、程經てノシロコの司する人にゆかり出來て、夫より添狀を乞得て、彼地にいたりぬ。頭よりの賓客なれば、ノシロコの庄屋、禮義を正して出迎ひたり。則庄屋の



思議といふへし
○チクニ　肥後國
阿蘇郡に屬す
○村井氏　村井椿壽なるべし
○高野の玉川　安齋叢書に云、高野の奥に玉川といふ靈泉あり、此水毒瀧川に入ては水也、故に弘法大師、人の此水をのまんことを恐れて、いましめ置れたり、その歌にもやすらん旅人わすれてもくみてのむ事はいかゞせん
○此國の先君　島津義弘のことならん。
○薩日隅地理纂考云、古帖佐屋敷跡（帖佐屋敷跡）義弘治所の西北に隣りて星山仲次陶工をなせし所なり、彼地に寓居す、其後栗野に於て始て窯器を製造す、是を賞し、星山仲次と名付、佩刀大小二口及び時服を與へて弘いたく是を賞し、携へ、義弘に從て來る、鹿兒島に來て船市來神之川に着し、彼地に寓居す、其後栗野に於て始て窯器を製造す、是を賞し、星山仲次と名付、佩刀大小二口及び時服を與へて世に古帖佐屋敷と云ふ、仲次は薬朝鮮人にて金海と云ふ、世々星山といへる所に住居して陶工を業とす、義弘征韓の役に蹈化す、文祿四年彼地の唐島より歸朝の時、金海其家人を金海より歸朝の時、
○此國の先君　島津義弘のことならん。
○薩日隅地理纂考云、古帖佐屋敷跡（帖佐屋敷跡）義弘治所の西北に隣りて星山仲次陶工をなせし所なり、彼地に寓居す、其後栗野に於て始て窯器を製造す、是を賞し、星山仲次と名付、佩刀大小二口及び時服を與へて

士班に列なる、是年の冬、義弘栗野より帖佐に移り、帖佐に従ひ細工所於屋地及び細工所屋敷等を造立し仲次に與ふ、即ち此地なり、かくて朝鮮傳法の茶器等種々の器を製し官用に備ふ、其の窯器を造らしめ、功を賞して祿十五石を與へ親ら細工に至り口命して窯器を造らしめ、其の能く成れるは、自判を記して愛玩に供し、常に愛薩摩焼と稱す、世に所謂薩摩古帖佐是なり、又古城元六左衛門（六左衛門は朝鮮人にして上方に遁れ、瀬戸陶の法を傳授せしむ）と共に上方に移り、凡そ五年にして還る、茶入水指等種々の器を製す、時に其の後弘治二年の冬、義久薩州出水に移りし時、仲次又従ひ移りて帖佐に住す、慶長十二年の冬、義久の命により、仲次是を鹿兒島に移して、倶に其業を廣め、以て今日の隆盛を開きて今鹿兒島竪屋敷陶家の始祖なり云々とあり

○陶工傳統誌に云、抑薩摩陶器の史傳ニ於テハ先ツ島津義弘チ推シテ巨擘ト爲シ、締化ノ韓人芳仲朴平意チ以テ第二指チ屈セサルチ得ス、文祿元年豊臣秀吉朝鮮チ伐ツ、薩摩國主島津義弘之ニ赴ク、其凱旋スルヤ、韓人伸氏、宇氏、朴氏、卞氏、姜氏、陳氏、鄭氏、車氏、林氏、白氏、崔氏、沈氏、尹氏、朱氏、金氏、何氏、丁氏等ノ若干名チ率ヒ歸リ、鹿兒島ニ居フシメ（後世之チ高麗町ト云）待遇茲メ厚シ、韓人芳仲ト云者アリ、相議シテ高麗傳ノ家に入り、酒飯等のもてなしを受て、初て對面して名をとへば、シンボウチユンと答ふ、其文字をとへば、伸佯屯と云といふ、さても珍ら敷御名也、殊に伸といふは唐土にはうけ給はり及ばず、朝鮮元來の御姓にやといへば、其事にて候、是は日本にわたりて後に改候也、元來は申と申候を先祖のもの此國に渡り上りし頃、太守へ御目見への時、披露の役人衆、猿と某を披露申されぬ、其塲にて爭ふへきにあらざれば、其儘に拜禮し終りぬ、是は申といふ字十二支の猿とよむ字なれば、帳面の名を斯よみ誤りて披露あられし也、其明年の年始拜禮の時も、披露の役人また猿なにがしと披露あり、跡にて某が姓は申とよみ申なりと斷り置しかど、其役人替ればまた明年も猿と披露あり、とかく人の聞ねもありければ、申とよめざるやうに人扁を付て、伸の字に改めぬるなりと答ふ、其由來も珍敷手を打て笑ふ、さて日本へ渡り給ひてより何代になり給ふにやと問へば、既に五代に成れり、此村中にも長壽にて積きたりしは四代なるもあり、又はやく替れる家は、八代にも及べるありといふ、然らば朝鮮は古郷なからにも、數代を經給へば、彼地の事は思ひも出し給ふまじといへば、故郷忘じがたしとは誰人のいひ置る事にや、只今にては、もはや二百年にも近く、此國の厚恩を蒙り、詞までもいつしか習ひて、此國の人にとならず、衣類と髪とのみ朝鮮の風俗にて、外には彼地の風義も殘り申さず、絶て消息も承らざる事に候へば、打忘るべき事に候へども、唯何となく折節に付ては、故郷床しきやうに思ひ出候ひて、今にても歸國の事ゆるし給ふほどならば、厚きを忘れたるには非ず候へども、歸國致し度心地候といへるにより、余も哀れとぞおもひし、扨又庄屋をつとめ給へば、村の人別帳有べければ其名前とも見せ給へと望みければ、則帳面取出し見す、庄屋五人組を初め一郷中、みな金、慶、山、白、孝、基などいへる名あり、いと珍らしくくり内のものの來りて高麗燒の細工物、幷ひに窯を見物す、仰山なる事ども也、此村半分は皆燒物師なり、朝鮮より傳へ來りし法を以て燒故に、白燒などは實に高麗渡りのごとくにて、殊に見事なり、日本にて燒たるものとは見へず、夫故に上

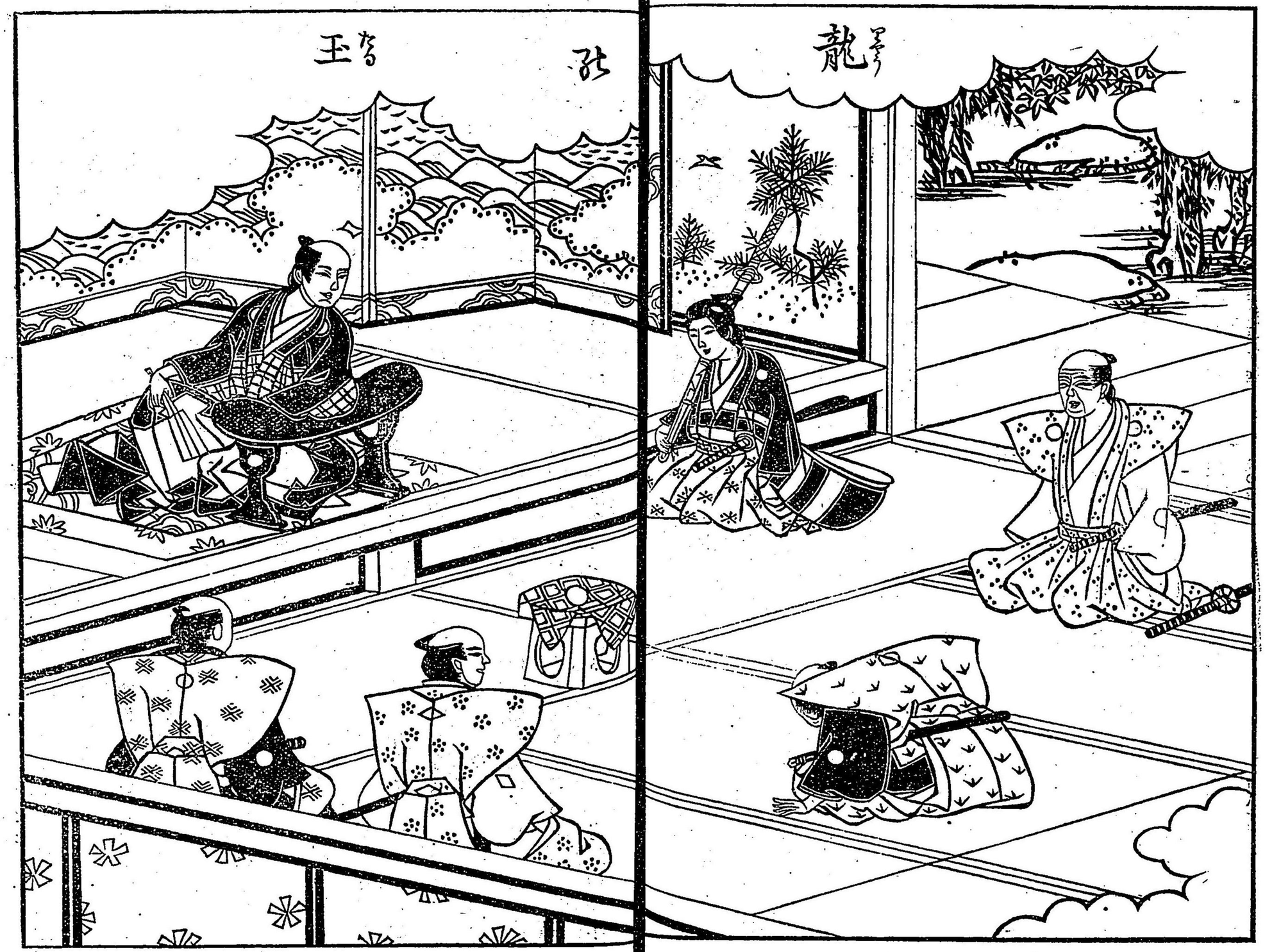
品の焼物は大守よりの御用ものばかりにて賣買を嚴敷禁せらる。これによりて平人の手に入事なく、他國にてももてはやせることを見ず。余も案内者に頼みて求めけれども、白焼は得る事あたはず、やう〳〵黒焼の中の上品の小猪口一つを得たり。これも余が遠國もの故に内密にて得させたるなり。携へ歸りて今に秘藏す。其外は下品にて質厚く色も薄黒く、烈火にかけても破るゝことなし。故に下品は土瓶なぞに多く造り出す。これは夥敷賣買して薩隅日の三州は、大方民間にも此土瓶を用ゆ。猶大阪までもうり來りて薩摩焼と稱して重寶とす。薩摩にてはノシロコ焼のチョカといふ。チョカとは茶家の心にて、土瓶の事なり。薩摩の方言なり。土瓶といひては知るものなし。扨夫より一郷中所〳〵方々見物し終りて、歸路に趣く。都て此ノシロコの風俗、皆惣髪にて額の上に集めてゆひたり。京の女の髷巻なぞいふ髪のごとし。禮儀の時は頭にまんきんといふものをいたゞく。馬の尾にて網のごとく組て、底なく耳の上に錫或は眞鍮にて木の葉の形の金物を左右に付、巾は額より後の方へ廻し當たるものなり。高き巾有、低き巾あり。高きは高慢巾といふ。上官なり。衣服は花色の絹にて袖廣く、法衣のごとく上み裾わかれたり。先裳を着て又衣を着す。上には桃色の細き丸き

陶業ヲ開キ國産ト爲シ、以テ恩ニ酬ヒントス、文祿四年我弘大隅國始メテ那帖佐ニ城キ、其十二月居ヲ移ス、乃チ芳仲等ヲ召シ居ヲ與ヘテ陶業ニ就カシメ芳仲ヲシテ統理セシム、遂ニ帖佐鄉鍋倉村御里（我弘居地ノ隣地ナリ、今人呼テ古帖佐屋舖ト云）ニ窯竈ス、之ヲ薩摩陶器開竈ノ祖トス、蓋シ慶長二年ノ頃ニ在ルヿ可シ、芳仲製スル所ノ陶器ハ皆高麗傳ニシテ、十八種ノ製法アリ、我弘甚タ之ヲ嘉シ愈匠ヲ助テ茶器ヲ造ラシメ、其最モ意ニ適スルモノヲ取テ自ラ珍印ス云々とあり

帶を結ぶ。下着は日本流の服なり。身幅袖はゞとも廣く、帶は多く前結びなり。女の髪は禮義の時は髻を二つに分て、平生はくし巻のごとくなり。斯のごとくの風俗にて馬を追ひ耕すを見るに、實に此身唐土に有心地して、更に日本の地とは思はず。斯無年貢の地を與へて此風俗を立置るゝ事、薩摩の廣きをしるべし。薩摩の朝鮮通詞は此村の人つとむ。當村にて平生は大方和語に馴たりといへども又よく朝鮮の言葉を用ゆるものありて、通事役をつとむるなり。都て薩摩は異國の船毎度漂着する故、諸異國の通詞役人有、此村の人の朝鮮通詞を勤るは尤の事なり。

## 龍の玉

薩州にて近き年、龍玉といふもの有。鷄卵ばかりの大さにて常に少しあたゝかにて、手の内に握れば、いかなる寒中といへども自然に暖氣有て、手爐の替りになれるとぞ。龍蛇は寒氣を恐るゝものの故、常に此玉を掌中に握るといふ。此故に絵に書る龍にはかならず其手に玉を握らしむ。希代の珍物ゆへに彼國のやごとなき人へ獻せりとぞ。又一つ城下の寺の什物として有となり。余彼地に有し


玉
龍

日親しく交りし人、此玉を所持する寺主と懇意成故にかねて噂して、余をも同道して彼寺に行て一見させんといひしに、彼人ことに繁用なる人にて終に其事果さざりぬ。今にして思へば殘り多き事なり。余寡聞にしていまだ斯のごとき奇玉世にある事を聞ず。誠に石には暖石とてあたゝかなる石ありて、庭の飛石などにして雪霜の積らざりし事ありしと云を聞傳へ侍る。又唐土の澳中に緬甸と云ふ所ありて、それより緬鈴といふ物を出す。其大きさ龍眼肉程ありて、人の肌の温氣を得れば、自然と動きて止ず、　近

き年京都にも何方よりか此緬鈴賣物に出て、かなたこなた取はやし、おのれと動く名玉なりとて、如意寶珠といひふらし、だまされ多くも王公貴人の御手にまでふれさせ給ひて、めでさせ給ひける、誰一人緬鈴といふものにてとは知らざりし、其果はいづかたへ買取けるや、行衛もしらずなりぬ。余も只其噂のみを聞て其物は見ざりき。彼龍玉もかゝるたぐひにてあらざりしや。其後伊勢國津の城下に遊びし時、余も緬鈴を見たり、大さ二三十匁の鐵砲の玉のごとく、重さ總に七八匁、唐金にて一作りたるものゝやうにて、内に鳴り響くものあり、掌中に握りて少し動かせば、其玉大に轡きうごきて掌をふるはす、　奇妙の細工

○緬甸は「ビルマ」國即ち Burma なり、支那の滇中にはあらず、四川省の西に當る、今英領に屬す

○津は伊勢國安濃郡に屬し、藤堂氏の城市なり

なり。此玉、津より五里ばかり西の方小倭郷佐田村彌兵衛といふ百姓の家に數百年持傳へて鳴玉と名付け、無上の寶玉のやうに珍重せり。

## 那須

前に出せる肥後國五ヶ村の南に連りて、那須といふ所有。是も同じく平家の人々のかくれ家にて、五ヶ村同樣の所なり。熊本よりは甚だ遠く、球摩よりは近し、凡十八九里、廿里ばかりも有べしやと、城下の人のいへり。救磨の城下よりは東北の方に當る。余が球摩に有し時、彼家中に那須何某といふ人有、殊に親しく交りしが、其人の先祖も此那須の名家たりしに、五百年前、此地の君の御祖先球摩に御入部ありしより、那須も出て御客分の列に加りて、久敵城下にありしが、數代御厚恩を蒙りしにより、終に其家臣に入らん事を願ひて、今の何某にいたるまで數十代恙なく仕へ來るなり。夫故平家より相傳の寶劍なども今に所持あり。此地を那須と名付し由來は、頼朝卿より那須與市宗高が舍弟何某といふに命じ給ひ、鎌倉にもれ聞しかは、

○救磨の城下は即ち人吉ふり

平家の餘黨追伐の爲に肥後に下し給ふ、那須某此地に下り吟味せしかど、平家の人々いと幽なる體にて再び事を起すべき氣色もあらざれば、那須も哀れの心生じ、數ならぬ雜人の首少々切登せて、平家の餘類殘らず追伐し畢ぬと鎌倉へは披露し、平家の人々には皆我那須の名字を讓りあたへ、此ものらは己が家族なりと披露し、其身も年久敷此わたりに留まり住けり。其後は鎌倉よりも吟味なく、平家の人々も恙なく一生を過し給ふ、其後平家の人の子孫も連綿として相連れり那須の子孫も繁茂して、二家ともに那須氏を名乘來れり。此地元來地名もなき深山を此人々はじめて人住地となせり。されは其人々の名字を稱して、其儘に那須といふなり。此那須に隣りて齋谷、椎葉山などいふ所は、皆むかしの落人の隱れ家の跡なりしとぞ。

○本文、那須の由緒正史に見えず、後人那須といふ地名に、那須宗高の弟なんど附會せるならん、盖し信ずるに足らず

○櫻島の大燒は安永十年のことなり

## 海水增減

鹿兒島の海は入うみなり、西の岸は薩摩、東の岸は大隅なり、南北凡二十里餘、東西十三里にあまれり。此海の眞中にさくら島あり、廻り七里なり。此海、南海の事なれば潮の滿干常に多し。然るに安永年中、さくら島大燒の以後、此海の水五六尺高くなれり、所によりては一丈餘も高し。鹿兒島の城下も下町、築町といふ邊は、月の十五六日潮の高く滿る時には、近年海水町に溢れ登り、甚難義に及べり。余か旅宿せし小山幸右衛門宅なども庭の中に、潮みち來り、常々難義せり。十四五日の頃汐高ければ町中高下駄にても步行しがたく、洪水のごとし。國主よりも色〳〵堤などを築て、潮の防ぎあれとも、全體の海高く成たる事なれば、いかんともしがたし。大隅の國加治木の近邊の濱手の村は、潮に引取られたる所もあり、又潮にたへかねて一村引はらひ、高き地面に移り住る村もあり。かゝる大海の水の五尺も、一丈も全體の高くなれる事、いかなる故ともしる人なし。まことにさくら島の燒し事は大變成しかども、海の埋れて水のたかくなる理もあるまじ。七つの新島を出現せしかども、大海の中にとりては增減するほどの事にはあらじ。彼邊の人の一說には櫻島の峰やけて土中より夥敷土砂を吹出しぬれば、薩摩、大隅二ヶ國の地中の土砂を吹上けて、此二國の大地低く成りたる故に、潮高く登り來るなりといふ、これもあまり廣大なる說なり。いづれ此入海はかりの水、櫻島燒の後よりたかく成たるは奇異のことなり。

○加治木は大隅給良郡にあり

潮の滿干は天地の脈動なり、然れどもまた土地によりて、少しづゝの違

平家の餘黨追伐の爲に肥後に下し給ふ。那須某此地に下り吟味せしかど、平家の人々いと幽なる體にて再び事を起すべき氣色もあらざれば、那須も哀れの心生じ、數ならぬ雜人の首少々切登せて、平家の餘類殘らず追伐し畢ぬと鎌倉へは披露し、平家の人々には皆我那須の名字を譲りあたへ、此ものらは己が家族なりと披露し、其身も年久敷此あたりに留まり住けり。其後は鎌倉よりも吟味なく、平家の人々も恙なく一生を過し給ふ。其後平家の人の子孫も連綿として相連れり。那須の子孫も繁茂して、二家ともに那須氏を名乘來れり。此地元來地名もなき深山を此人々はじめて人住地となせり。されは其人々の名字を稱して、其儘に那須といふなり。此那須に隣りて齋谷、椎葉山などいふ所は、皆むかしの落人の隱れ家の跡なりしとぞ。

○本文、那須の由緒正史に見えず、後人那須といふ地名に、那須宗高の弟を附會せるなら ん、蓋し信ずるに足らず

○櫻島の大燒は安永十年のことなり

## 海水増減

鹿兒島の海は入うみなり、西の岸は薩摩、東の岸は大隅なり、南北凡二十里餘、東西十三里にあまれり。此海の眞中にさくら島あり、廻り七里なり。此海、南海の事なれば潮の滿干常に多し。然るに安永年中、さくら島大燒の以後、此海の水五六尺高くなれり、所によりては一丈餘も高し。鹿兒島の城下も下町、築町といふ邊は、月の十五六日潮の高く滿る時には、近年海水町に溢れ登り、甚難義に及べり。余か旅宿せし小山幸右衛門宅なども庭の中に、潮みち來り、常々難義せり。十四五日の頃汐高ければ町中高下駄にても歩行しがたく、洪水のごとし。國主より も色〳〵堤なぞを築て、潮の防ぎあれとも、全體の海高く成たる事なれば、いかんともしがたし。大隅の國加治木の近邊の濱手の村は、潮に引取られたる所もあり、又潮にたへかねて一村引はらひ、高き地面に移り住る村もあり。かゝる大海の水の五尺も、一丈も全體の高くなれる事、いかなる故ともしる人なし。まことにさくら島の燒し事は大變成しかぞも、海の埋れて水のたかくなる理もあるまじ。七つの新島を出現せしかぞも、大海の中にとりては增減するはぞの事にはあらじ。彼邊の人の一說には櫻島の峰やけて土中より夥敷土砂を吹出しぬれば、薩摩、大隅二ヶ國の地中の土砂を吹上けて、此二國の大地低く成りたる故に、潮高く登り來るなりといふ。これもあまり廣大なる說あり。いづれ此入海ばかりの水、櫻島燒の後よりたかく成たるは奇異のことなり。

潮の滿干は天地の脈動なり。然れぞもまた土地によりて、少しづゝの違

○加治木は大隅給貳郡にあり

あり。北海の潮はさし引、わづかに二三寸の間なり。南海は滿干多く、こと
に藝州嚴島、備後の三○○原、攝州住吉、伊勢の唐洲なぞは潮の引と二丈三丈
にも及ぶなり。都て南海の南面の海は滿干高し。又土地の樣子によりて
潮の流れ方違ふなり。備後の鞆の邊より西は潮西に行、東は東に落。これ
は入海なればさも有べけれど、大洋の中にても潮の東西に流れ、南北に
分るゝ事あり。阿蘭陀人の舟路の圖に委敷圖したり。日本近海にても伊
豆の沖百三四十里南へ出て、無人島へわたる海に黑潮といふ所ありて、
數十里が間大河のごとく、只一筋、水逆巻て流るゝ所有となり。又東南の
かた安房、上總の沖に遠く出れば、潮只東の方へのみ落て、船なぞも夫よ
りひがしへ落されては又かへるとなしと、これらは理をいはて知りか
たき事なり。又○唐土○瓊○○海の潮は十五日より前は東へ落、十五日の後は西
へ流れて、一月に只東西へ流るゝのみにて、晝夜のさし引なしとなり。奇
のまた奇なることとなり。

○三原　備後國御調郡に屬す
○唐洲　伊勢國一志郡矢野村の海濱にあり
○唐土瓊海　とは支那廣東省瓊州島と廣東本地との間の海峽を云ふならん





唐土の楓の事は、過し年唐土へ仰遣されて三本渡れりとぞ。其中一本は枯て今
日本に只貳本のみ有りとなり。余も其樹の葉とて見し事のありけるが、大さ掌
の如く三ツ又にて殊に厚し。實は楓球とて栗のいがに似たり。秋ふかくなれば
其葉黃色に變せり。日本の○○紅○葉とは大に異なり、日本の如く艶美なるものには
あらず。又頃日、我友關谷氏、長崎の御藥園の楓樹の種なりとて二本需得、携へ登
りて、余が家園に植しに、葉の形は三ツまたにて初のものに似たれど、其木の小
き故にや、葉薄くして小さし、只三つ股といふばかりなり。此國の紅葉に甚だ相
似たり。其實をとへば此國のごとく蜻蜓の小あるがごとしといふ。されば球に
はあらず、たゞ此國の紅葉と同類異種といふべし。されど關谷氏が携へ登りし
も唐土より將來の木に違ふ事は非ず。是を以て考れば日本の紅葉にも異種數
百種あるが如く、彼國にてもいろ〳〵の楓あるべし。別に召れしは唐土にての
最上の品なるへし。然れども只詠めに興ずるには日本の楓遙に勝れり。我國の

○日本の紅葉は淺名柵にて學名は *Acer palmatum, Thunb.* たり、本條に云ふものは三角楓にて學名 *Acer trifidum. Thunb,* ならん

○南谿が霧島山に上りしこと正編卷五に見えたり

○曾木某　異本西遊記後篇に云、大隅國加治木の邑に曾木貢と云人有り、太閤朝鮮御征伐の頃此曾木氏の先祖拔群の手柄有て太守より錢舜擧が畫る櫻の圖を賜り、今に彼家に傳へて重寶す、

○錢舜擧　名は選、舜擧は其字なり、玉潭、又巽峰と號す、元朝の人にして畫を能くす

をこう愛すべし。又或說に日本には楓なし、されは日本にては只紅葉或は機樹、鷄冠木などゝ稱すべし、楓とは稱すべからすといへるも僻說なり。日本にいふ處のものも楓の外なるものにはあらず、只楓の同類異種なれば紅葉を楓と稱して當らずとはいふべからず。又余が霧島山の奥に入し時、種々の奇樹異艸數〳〵見し中に、彼楓に甚だよく似たるもの有りき。余元來本艸物產の學に疎ければ其當否はしらず、しばらくしるして後の博識者をまつ。

## 唐畫の櫻

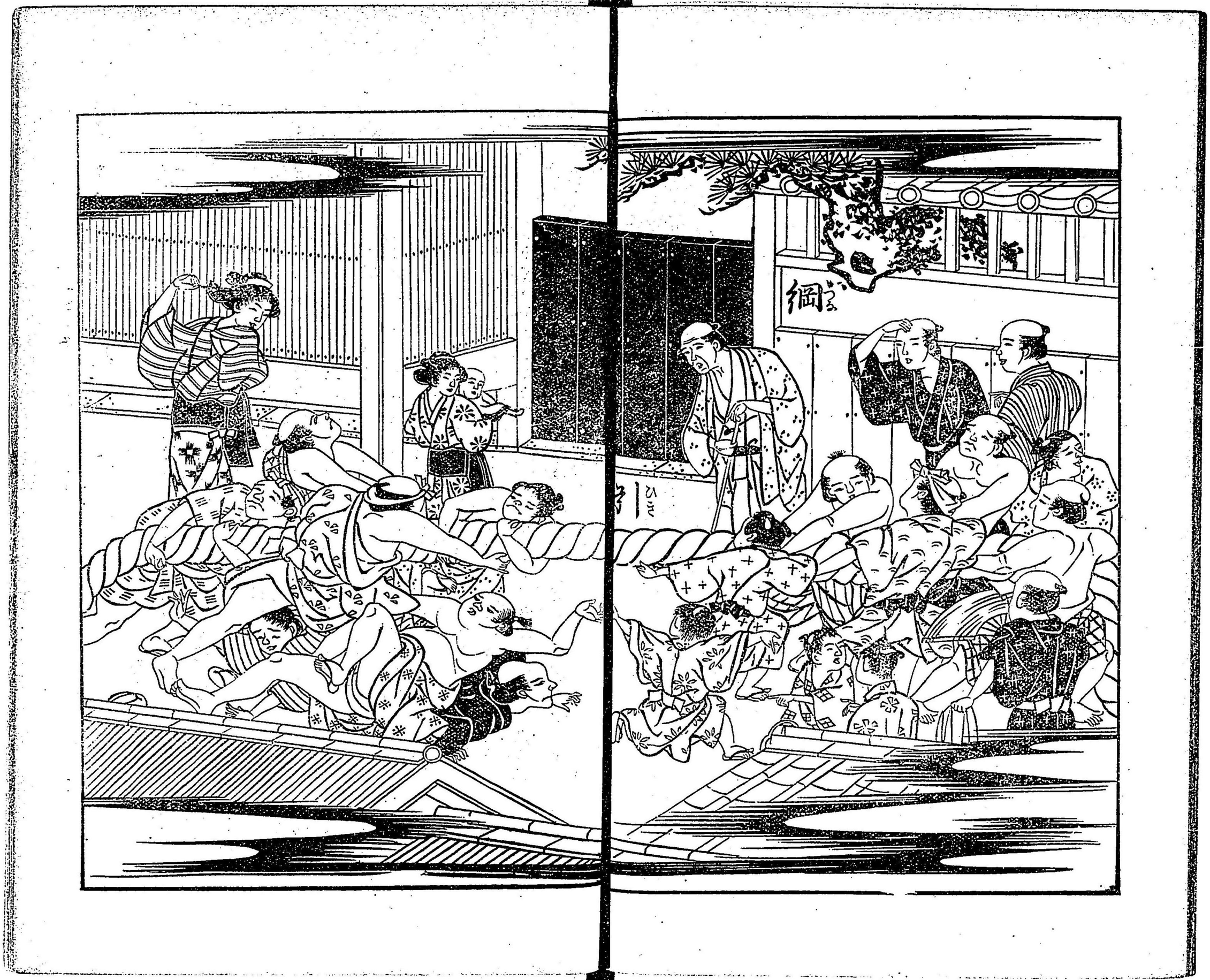
大隅國加治木といふ所に曾木何某といふ士あり。此家の祖先の人軍中に手柄の事有て、其君より錢舜擧が畫ける櫻の圖を賜りて、今に曾木氏代々傳へて家の重寶とす。其花形艶美にして、今世にある櫻に異ならずといふ。然れば唐土にも櫻花ありて舜擧是を畫けるや、まことに奇代の珍物なり。按ずるに唐土に櫻の沙汰ある事宋の王荊公が詩なども見ゆれど、此國の櫻のやうにも思はれず、此國のごとき櫻あらば、代々の文人詩客何ぞ是を愛せざらん。彼國の詩文に桐花、棟花の類の數にも入らぬものだにも、こと〳〵敷吟哦を費しぬ。唐土人も目なきものにはあらず、櫻あらば桃李のみ、何ぞ春の名に立んされば櫻は庭のみのものにして、唐土人はみな事を得ざるものなり。いろ〳〵の證據を取て彼國にも櫻ありといふは僻說といふべし。舜擧が畫のさくらも此方より渡りゆきし櫻の圖によりて摸寫せしものにや、只唐土人に見せたきものは紅葉さくらの二種なり。

○山崎闇齋の櫻記に云、千武陵が白櫻樹の諸篇に記得花開雪滿枝和レ風和レ蝶帶レ花移、只今花散遊蜂去、空作二主人惆悵詩一といへり、萬首唐人絕句第八卷に出たり、唐の歐陽詹が園前の櫻蕊の未折を見て山櫻先レ春發、紅蕊滿二霜枝一、幽處竟誰見、芳心空自知、似レ分二朝日照一、疑畏二晚風吹一、欲レ問含レ彩意恐驚輕薄兒といへり、十二詩選に出たり、宋の王安石山櫻の詩に山櫻抱レ石蔭二松枝一、並比二餘花一發最遲、頗有三春風嫌二寂寞一、吹レ香渡レ水報二人知一といへり、介甫集第八卷異廿八卷に見へたり、されは彼國にも曾て愛する人なきにしもあらず、これらの詩を吟するに我國の櫻のことし

○王荊公の詩　前に掲ぐる王安石の詩のことなり、王臨川詩文集に見ゆ

## 綱引

薩州鹿兒島、八月十五日太き腕のごとき長さ半町壹町にも及べる大繩を作り、大道の眞中に引渡し、小兒夥敷集りて左右に別れ、此繩を引合ふ事なり、後には夜るの事なれば、若きれのこ皆出て引く、其賑やかなる事祭りの神輿のわたるが如し、是を綱引といふ。古代には上方にも有しと聞しが、今邊土にのみ殘れり。彼國はすべて此十五夜には家々多く門に出て、三味線をひき酒を酌て遊ふ、甚だ賑やかなり。余も此時彼町見物し、步行て夜更るまでたのしめり。


綱
ひさし

## 産婦

小琉球、德の島の邊は婦人皆産すれば、其産屋の邊りにて一七日が間、晝夜火を燒ことなり。家富る者は何百束燒るとて薪を多く燒たるを手柄とす。貧しき者までも皆夫〳〵に燒なり。夜も白晝のごとし。其故に其家は格別暖氣にて汗も出るほどの事なり。上方などの産婦は只逆上する事のみを恐るる故、燒火をみる事などはこのまず。況や其如く晝夜夥敷燒て火氣にせめられては、必ず穩なる産婦にても逆上の憂起るべし。上方にては忌べき事を彼地にては返つて養生に成と思へり。むかしよりのならはしは不思義のものなり。元より邊國は腹帶といふ事たへてなし。椅子の中にすはりて横寐せずといふ事もなき事なり。産後は心よく横に臥て氣血を納る事なり。邊土には醫者も取上婆もなけれども、皆安産して難産は甚だ稀なり。又薩州のはし〴〵の風義にて小兒疱瘡する時に初より終まで白粥をゆるく煮て、夥敷しひくわしむ。晝夜是を進めて其粥の汁ばかりにても飲しめ、其底の堅き處は家内の人喰盡さざれば、干飯となし貯ふ。其干飯夥敷出來て壹人の疱瘡人あれば何斗といふ干飯出來るなり。家富

○徳島　は大隅國南方の洋中にありて大島郡に屬す、周圍三里二町

○棟花　「せんだん」なり

○北窓瑣談後の三に云、薩摩大隅の田間に疱瘡を病む家粥を多く食て其粥の汁を病兒に多く強飲せしめ、殘の粥は家内の者食らひてなほ餘りあればほし飯となす、只ひたすらに多く食せしむる事を上策とす、痘中に敷斗の米を煮事なり、只米を多く煮たるを養生の行といきたりしとて宮家には敷斗に及ぶことなり、故に病人却て飲食停滯の患ありて害を起すこともまゝ有なり、又屋久の島、德の島、大島邊には出産の家かならず多くみだりに火を燒事なり、晝夜とも莫大の薪を集めて只ひたすら火を多く燒を養生の第一といふ、故に宮家にては一日の間に數百束の薪をたきつぶす事なり、如此して上逆の患多からざるも不思議なり、産倚頓帶の事はむかしよりなしといふ

○肥前國大村の人云ふ、余が郷里にも疱瘡を忌み恐れて患者を山に移す風あり、故に疱瘡山の名ある所ありと物語りき

○小雲島　嶋取山といふ、紀伊國日高郡にあり、那智山の北にあり



る者は粥を多く養て介抱の丁寧なりし樣にいふとなり。貧しき家も五合一升の粥の毎日養ざるはなし。斯のごとく無理に強て小兒に飲しむる故に、皆食滯或は嘔吐の患起りて、疱瘡の外の病を引出す事有り。されども土地の習はしなれば醫者の詞を用ひず、是又他國に無き珍敷事なり。彼島方には今に至り一向に疱瘡無き地もありとぞ。薩摩大隅の邊鄙にも近き世までではなかりしかど、他所へ出るもの年老て後も疱瘡する事ありて、老後疱瘡すれば殊に重く、多くは死す。其全く疱瘡無き憂なりとて、他所より疱瘡人を多く取よせ、疱瘡はやらし候事あり、其始ての時は大流行にて老若皆一同に疱瘡して死するものもおびたゞしかりしが、其後は世間並に疱瘡行れて、今にては陸つゞきの所には、疱瘡なき所もなしとなり。前は疱瘡の人たま〳〵あれば、殊の外に忌嫌ひ、父子夫婦の間にても是を病時は必す遠き野山に小屋をかけ、飲食を添て其所に送り捨て、全快してみづから歸り來るまでは、おとづれもせずして置たりしを、近き世にいたりて國の守より答させ給ひ、世間並の介抱する事となりたりとかや。都近くても熊野の山中などに疱瘡を甚だ忌み恐れて、若疱瘡するものあれば、山中へ別に小屋をかまへて送り出す事とす。余が通行せし時にも小雲島といへる

○多くみだりに火を燒事なり、晝夜とも莫大の薪を集めて只ひたすら火を多く燒を養生の第一といふ、故に宮家にては一日の間に數百束の薪をたきつぶす事なり、如此して上逆の患多からざるも不思議なり、産倚頓帶の事はむかしよりなしといふ

○肥前國大村の人云ふ、余が郷里にも疱瘡を忌み恐れて患者を山に移す風あり、故に疱瘡山の名ある所ありと物語りき

○小雲島　嶋取山といふ、紀伊國日高郡にあり、那智山の北にあり

○大和國吉野郡十津川郷三村組四村組東村組の三組には疱瘡を忌嫌ひて恐怖すること甚しく、若し村民にして疱瘡に罹れば村吏直に村民に指揮して嚴に交通遮斷を行ひ、村里を距ること半里許にして鷄犬の聲も聞ゑざる山谷に小屋を設け患者を移すを例とせり、患者を移すには多く夜を以てして豫しめ其時刻を村内に告知らするを以て、期に至れば村内嚴に燈火を滅し聲を呑て潜居す、これ痘瘡は一個の鬼神ありて人聲に應じ或は火光を認むれば忽ち飛び來ると信ずればなり、このこと和漢醫林新誌にみゑたり

峠のこなたにて、駕籠の者小あげの人足をやとひけるに、折節余風の心地なりしかば駕籠の戸障子さしかためてありしを、小あげの人足見て最早約束は致しつれども、人足には出申まじといふ、駕籠のもの怒りていかなれば今に至りて變改はするぞといふに、彼もの答へて御駕籠の内は疱瘡の御人ところ見ゆれといふ、駕籠の者笑ふて是は御醫者なり、疱瘡人には非ず、疑しくば戸を明て見すべしといへば、疱瘡を療治に行玉ひたるにあらずやといふ、余もおかしくて戸をひらき立出て、近き頃疱瘡はみたる事もなしといひけるにぞ、漸く安心して小あげの人足には出たり、斯のごとく忌きらへば、妻子といへども山中へ送る事空言にもあらじと覺ゑ候、又た安藝國嚴島など神地なる故穢のを殊更忌なり。此島の女、産に臨む時は急に舟に乘て藝州の地方に送り、嚴島にてはむかしより産する事なし、少し腹痛むや否や舟に乘する事なり、輕き時は濱端にても安産するもあり、又船中にて産するもあり、かく産前に動する事危ふきことなれども格別の難産もなく、又産後の病ひも起らず、所々の風義とておかしき事どもなり。

## 奇器

○「エレキテイル」は發電機をいふ、電氣の蘭語エレクトリシテイト Electricitet の轉訛なり

○越列機は火を取る機械と思ひしとは我國にて始めてこの器を創作せし平賀源内もしかいひたり、源内エレキテールを三井某に見せて、是は人間の體より火を取候道具なり、頭痛又は熱氣つよき者は火を取候得は即坐に全快致すなりと語りしこと鳩溪實記にみゆ、その他後藤梨春の阿蘭陀話、大槻玄澤の磐水夜話等にも人身より火を取る器械のやうに脱げり

細工の微妙なる事は世界の内阿蘭陀に勝る國なし、二三十年以前エレキテイルといふ器物を日本にわたす、是人の身より火をとる道具なりといふ、大サ三尺ばかりの箱の中に車を仕かけ、其箱の中より鐵のクサリを出し、長サ二三間にして曲錄の手につなぎ、人を其曲錄にのらせ置、箱の車をめぐらせば、其氣クサリを傳ふて曲錄にいたり、其人に應ず、紙をこまかに切て、其人の手に近つくれは、其紙おのれと動き舞ふ、又外の人の手を此人の手に近づくれは、油のはしるがごとき音ありて、火出る心地す、其奇妙なる事まのあたりみるにあらざれは信ずるものなし、又虫目鏡のいたりて細微なるは、わづか一滴の水を針の先に付て見るに、清淨水の中に種々異形異數の虫ありて、まだ世界に見ざる處の生類遊行したり、又潮を見れば六角成物の集りたるなり、油は丸きものゝあつまりたるなり、水は三角なるものゝ集りたるなり、其外酒鮓などには色〳〵夥敷虫あり、一たび是をみる時は酒、酢、水ともにいづれも飲がたきほどにみゆるなり、誠に華嚴經の中にや佛の水をこして飲べしと仰出されしかど、天眼にて

○岩橋善兵衛の望遠鏡　北窓瑣談に云、「寛政の初に和泉國貝塚の人岩橋善兵衛、日月星辰を見るへき望遠鏡を自身の工夫思慮を以て作り出せし、其望遠鏡出て後、二三年經て、阿蘭陀よりナクトケイキルといふ日月星辰を見る望遠鏡を渡せり、浪花の人此ナクトケイキルを求め得て余が朋友も一覽せり、其見る所の日月星辰の眞象蠻制の目鏡と善兵衛制せし目鏡と符節を合せるがごとく也とて、善兵衛作は長大なる故に一しほ明白にて勝れりと云、余が家にも善兵衛制作の望遠鏡は所持して、其精妙なる事を知る、蠻制の物いまだ見ず、先年より蠻製の望遠鏡諸所に有りと唱れども、皆虚説にて余天下に歷遊して尋しかども、誰人所持といふ事を聞ること非りしに、善兵衛日本に

みる時はいかほどこすといへどもかぎりなき故に、只俗眼の及ぶばかりをこし去てのめよとみへし。是らの虫目鏡は佛の天眼にもかへつべし。また一滴の清淨水に種々の生類有べしとは、誰人も信ぜざる事なれども、現在見る人ありといへば、余義なし。かゝるうへは又此目鏡の及ばざる細密の所に世界をなして住もの有やしるべからず。されば細密なる事にはいかばかりといふかぎりもあらず。此理を押せば、また大なる事にも限りあるべからず。此人の住る一天地へ滴の水のごとくにして、斯る天地幾万億重なり居て、又その外より虫目鏡を以てみるもの有べからずともいひがたし。されは此肉眼のおよばざる所を論ずる時は、又此肉身の智慧のはかりしる所にあらさるべし。然るに蠻人道具を造り出して、天より此身に受得たる分量の外にいたる、誠に奇妙といふべし。又望遠鏡とて日月星辰まで力の届く遠目鏡ありて、日月の眞象を見分ち、星も太白星をみれば月のごとく盈虧あり、木星をみれば三つ引の紋のごとく横に帶あり、土星をみれば斜に輪まとひて星の形長くみゆ、其外銀河の白き所をみれば、小き星夥敷聚りたるにて、其小星よくわかりて數へつべし。近き比泉州の人岩橋善兵衛、此望遠鏡を作り出して、阿蘭陀渡りの望遠鏡よりもよくみゆ。余



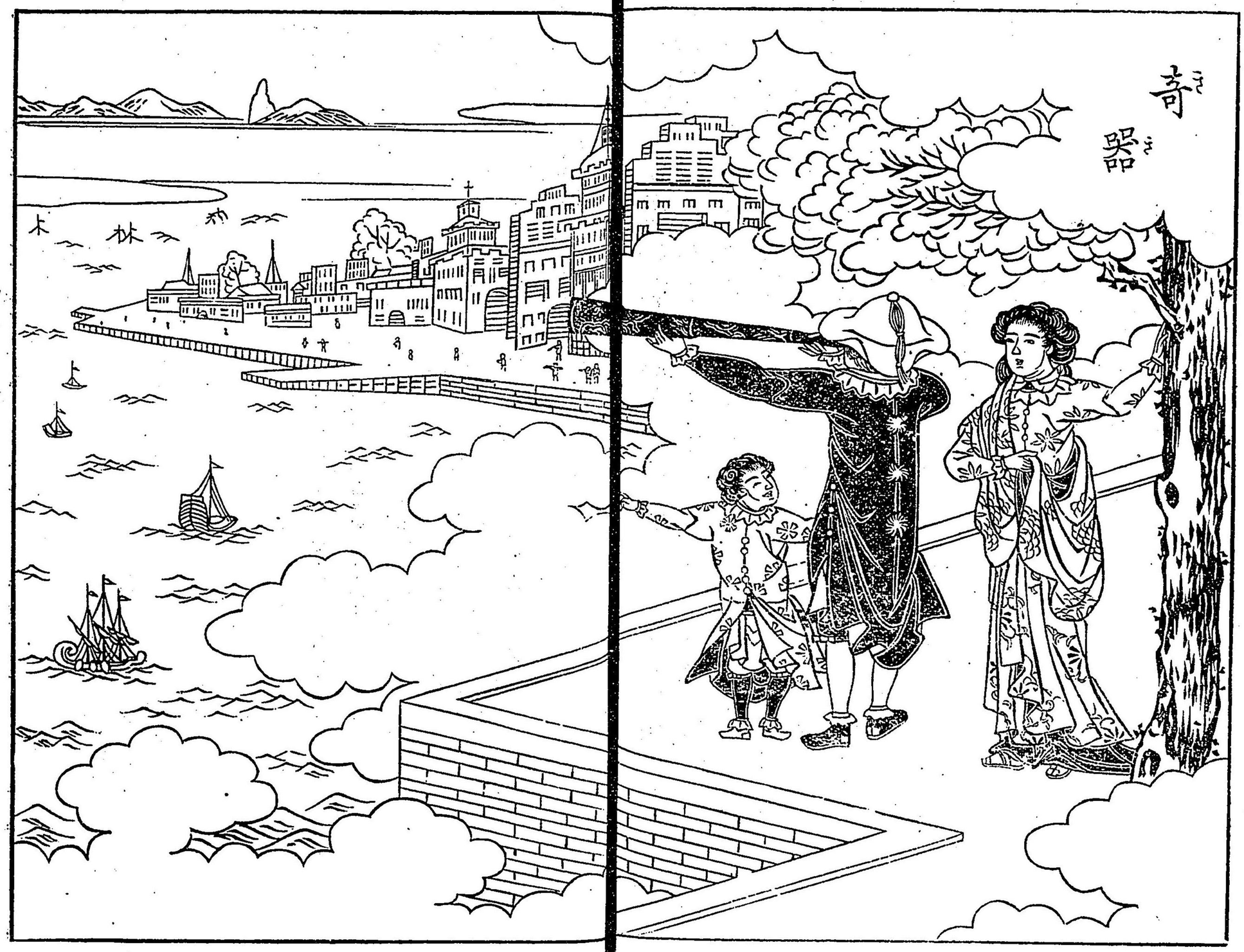
て始て作り出す頃に、また紅毛國よりも渡り來れるは、時運の開ける時節といふもの奇妙なることなり」あり、と閑田次筆に南谿の宅にてこの望遠鏡を試驗せしこと詳に記したり、長ければ畧す

○今年外禁珍談に載せたる天明三年七月廿九日阿蘭陀通詞中山作二郎の報告書に「當年來朝之阿蘭陀船壹艘六月七日咬噌吧出帆仕海上無別條今日當地着岸仕候云々　古かひたん　いさあかてつたんき　新へんてれき　かそふるんけ」とあれば天明三年なり、されども南谿長崎に至りしは翌四年なるべし、今年といふは誤れるか

○イサア、カテツシンキ　北窓瑣談後の二に云、安永天明の間に長崎へ來り居りし阿蘭陀のカピタン役、イサアカテツシンキと云へるは、甚本

が家にも所持す。又隣目鏡とて高塀を打越して隣をみる目鏡あり。又暗夜に遠方をみる目鏡あり。猶この外にも種々の奇器、人の耳目をおどろかすもの年々にわたり來れり。まのあたりみざる人には語りても信じがたき事なり。

彼阿蘭陀國は日本へ通する國の中にて第一に遠き國なり。行程一萬里の餘にして、西北の方に當れり。日本へわたり來る彼國の頭役のものをカピタンといふ。今まで居たりしカピタン、其名をイサアテツシンキといふを、ヘンテレキカスフルロンヘルゲといふカピタン、今年交代して來れり。彼國の人只肉食を專にして五穀を食せず、蕎麥の粉を少しづゝ食す、五穀生せざる故なるべし、夫故にや壽命も日本とは短く、四五十位を老年と云、新にものをしる事を第一の手柄とす、其故に天文などにても右のごとく道具を作りて現在に見屆、終に其心に通じて萬國に勝れたり。地理もまた舟を至極丈夫につくり、大海にのり出し、世界中を廻りて現在に世界殘らず見屆たり、故に其委しき事又萬國に勝れたり。余も長崎にて阿蘭陀持來りし萬國の圖をみるに、此あたりにて持はやす板行の圖とは格別にして、萬國ともに至つて委しき事なり。いかゞして圖


奇器

を作り得たるものにやいぶかし。東西は大地を一めぐりして東より出船して西より歸國せりといふ。只南北のはては寒暑の氣格別にして、命保ちかたきゆへに至りみる事叶はず。夫ゆへ南極星の下と北極星の下の國とは圖を略せり。又彼國にて細工ごとを工夫するに其身一生にて考へおふせざる事は、其子に繼て考へ、其子にして考へ得ざるむつかしき工夫事は、又其孫にも讓り繼て、二代三代も考へて造り出すゆへ、奇妙の道具をつくりはじむるなり。其人物をみるに日本とは格別に異なり、其氣象も尖くして人におくれず、纔の人數にて數千里の大海を隔て萬國に渡海す。其召使ひ黒すといふものあり、またマタロスといふものも有、是は外國の人のよしなるが、阿蘭陀人召使ひの爲に、此もの共を一生買切にて抱へ來れるなり。よく水に入、又よく帆柱に登る。成程世にいふ如く惣身黒し、然れども漆に塗たる如くには非ず。すべて異國の人をみるに唐土の人は衣服言語違ひたる計にて、只情と其趣は日本に少しも替る事なし。もし此方の衣服を着せ、此方の言葉を習はしめば、此方の國に打交へたりとも分つべからず。琉球は衣服も日本に似、詞も能通ずるなり。然れども其性温柔に過て日本の人には似も寄ず、阿蘭陀は剛強にて少しも温和の風みへず、立まじわれは日本の人は殊にぬるきやうに見ゆ。其違を案ずれば、天地寒暖の氣によりて、天生ずるものの〳〵差別ありと見へたり。唐土は北極星地を出ること三十五六度の國にして、日本に同じく四季の氣備はれば、唐土日本ともに人物鳥獣草木までも皆同じ蒸加減に出來る故に、其氣象もかはらざるなり。琉球は南方へ寄たる國にて、雪氷の類もなき國とも云べし。されば熱氣はよく物を柔らかにする理にて、其氣象までも和らかなり。紅毛は大に北へよりたる國故に、夏なき國ともいふべし。寒はよく物をかたむる理にて、其氣象も強きに過たり。されば東西は數千万里隔てたれ共、寒暖の氣たがふとなければ、万物大方同しやうに生じ、南北は四五百里以上より千里も違へば、氣候大きに異なりて、天地陰陽の蒸かげん、格別あるゆへ万物其皆樣子違ひて、人の氣象も夫に應じて異なりと見へたり。纔に一二百里の違ひある日本の地の内にても、南國と北國とは草木も格別にて人の心もやゝ異なりまして況んや世界の廣さにて、大に千万里を隔たるをや。此理

○同書後の三に云、廣く天下の人を見るに賢人など皆短命にて五十ばかりにて死するなり。日本の七八十歳にて死する者の如く長壽を得たるさいふことぞ

○「マタロス」は水夫の義、蘭語Matroosの轉なり

邦の製を慕ひ、阿蘭陀館のカピタン部屋を日本流に作りて住りとぞ又云、カピタン役イサアカテツシンきは好事の男にて、學問は兎角唐土の文字便利にて微細なりとて支那學をし、少しく漢文を作る事も出來、唐土の書籍を讀事もよく讀りとぞ



○琉球は西經十一度二十六分より十七度に至り、北緯二十四度六分に起りて十六度五十二分に至る。其氣候は極寒も十三度、極暑も三十四度の間を昇降せり

を押て見るときは、居ながらにして世界の氣象も産物も大抵は知るべし

## 劍の舞

霧島山の歸路、大隅の國新川といふ所より便船なりとて、すぐに乘り移りしが、其夜は風なく殊に潮引て船出がたしとて、潮みち風出るを待居たり。船中二十五人のり合にて、甚だ賑やかなるに、顯姪郡の女五六人其中に有しかば、傍らの人口〳〵に西目うた面白し、女どもも諷ひきかせよと進むるに、はじめのほどは恥かしげにいなみ居たりしが、後には和し來りて顯姪郡の海門が嶽はうけつな嶽よ、雲の帶してによき〳〵と同音に諧ふ、邊鄙の音聲ふしをかしく目さむる心地す。夫より燒酒など買來りて、船中一同にさゞめきたのしむ。しかるに漸夜ふけて潮さし來れとも風なくして船の出しがたきに、皆々退屈して風もがなと待わぶるに、乘合の中に一人山伏ありしがいうやうは、かゝる海上にては いかなる誓恵も勇氣も施しかたきものなるが、我道とする修驗こゝろむかしよりいちじるしきこともあり、熊野を救ひし山伏は日野資朝の子阿若を佐渡の海に救ひし山伏のことにして太平記にみゆ

○新川　古名天降川といひ、源を霧島山中に發し霧島川となり、南流して噌唹郡東郷村にて金山川に合し、更に南に流れて桑原郡國府郡濱市に至り海に入る、長八里、潤壹町

○熊野を救ひし山伏　日野資朝の子阿若を佐渡の海に救ひし山伏のことにして太平記にみゆ

○辨慶知盛の幽靈を禦り退くること源平盛衰記に見えたり

○道三、曲直瀨氏、名は正慶、字一溪、雖知菴、又盡靜翁と號す、京都の人にして田代三喜に從ひて醫を學び、業成りて其術尤も顯はれ、正親町帝より翠竹院の號を賜ふ、世に醫方中興の祖と稱せらる文祿三年正月四日歿す歳八十九

○豬苓　多く楓樹に寓生する苓の類にて、豬の屎に似たる故此名あり、通名にて稱ふ、物品識名に奥州南部にてヘキドと呼ぶ由見ゆ、本草綱目卷三十七に宗奭曰豬苓引レ水之功多とあり



○辨慶　○大物の浦にて　○知盛の　○幽靈を　○いのり退く、こよひ北風を祈り出して見せ申さんやと、おこがましく打出るに、堂の間にのり居し男、年の頃四十ばかりにて鼠色の旅合羽を着たるが、長き刀のちり打はらひ、是は谷山の安行が鍛ひたる一腰なり、むかし海上を過る人の難風に逢ける時、安行が作のかたなにて打入浪をはらひしに忽ち波風靜りしかば其奇特より波の平の行安といふ名を得しとかや、今此刀を所持致せばいかなる逆浪おこるとも、人々氣遣ひあるべからずと、同じくたはふれ出たれば、余もこと〳〵しくこわづくりして道三が荒井の海のためしもあれば、醫者とても海上に益なしとはいふべからず、殊更此袋には種々の藥品所持致せば、猪苓澤瀉はよく水をおひ、防風桂枝はよく風をおさむ、いかなる風波にあふとても、山伏殿にやおとるべきと、おのがさまざま身に生ふるとをたはふるゝに、船中手を打てみな〳〵わらひどよめく、いかにも山伏の奇特にや、丑の刻過より山々の峯に雲出て北風大に吹起る。船頭悦びて心地よきはなしにてよき風をむかへたりとて、順風に眞帆をあげてはしるほどに、暫しが間に五六里ばかりのり出たり。然るに風いよ〳〵はげしくなり來りて、大波頻りに逆まき、後には風の方角さへやゝかはり、何となく胸騒く

○澤瀉　「へらおもだか」にて澤瀉科植物なり、本草綱目卷十九に云、宗奭曰澤瀉之功長ニ於行レ水さあり

○防風　通名にて呼ぶ、撒形科植物なり、本草綱目卷十三に云、時珍曰防者禦也、其功療レ風最要也、故名ニ屏風一者防風隱語也、

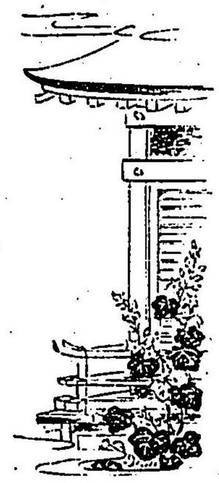
○桂枝　桂の樹皮なり、雲葉科植物なり、本草綱目卷三十四に云、仲景又言桂枝者取ニ桂上皮一者也さ、又云、時珍曰、桂枝透ニ達營衛一、故解レ肌而風邪參

ばかりなるに、帆ばしらのもとに居たる年老たる船頭いふは、天氣替ると見へたり、風もいかにや吹かわるらん、梶とり油斷すべからずと、高らかによぶ。かぢとり居たる男は、年若くて頰髭あれ、宵よりもたけ〳〵數ものなるが、此風の替るやうやあらん、大海のうへに世をわたるわれなるに、楫のさし圖無用なりとてかるしめ居るを、船頭いよ〳〵氣遣ひて、海上は大事の者なり、ことに人は多くのせたり、いかに功者なればとてあなどるとあるべからずといふにぞ、船中のもの皆〳〵おそろしく覺束なく成りて、船頭がとは尤なり、かぢとり社にくき奴かなと、口〳〵にのゝしる。かぢとりも猶あらろいて船のあつかひ、素人のしるとにあるべきや、やかましき乘合かなと雜言に及ふにぞ、旅合羽着せし男大にいかり、慮外なるかぢ取かな、きやつ引のけよと呼はるに、かぢ取も大にいかり、此男はのり合船に我儘なり抔たがいに惡口に及びしが、氣短なるかぢ取二尺餘りの大脇差をひらりとぬき、月影にかゝやきて稻妻のごとくなりけるが、彼男を目がけ飛でかゝる、彼男も刀おつ取立上る。船中湯のわくがごとく騷動して、女童は泣まどふ。されどもひしとのり組たるふねなれば、いづくへにぐべき便りもなし。船頭二人すかさず中にかけへだたり、ふとんを刀に打かける、乘合の者も皆〳〵折重なり、終にかぢとりをおさへける故に、雙方怪我なく騷動しづまりたり。しかるに風はます〳〵急にして、舟は矢を射るがごとく岸に着たり。騷動の間ふねをあやどる者もなかりしかども、ふしぎにつゝがなくてつきたりしは、神明ありともいふべし。兩人ほどちかく居より居たらましかば、たがひに切むすびて手をも負ふべかりしを、程へだてたればこそ、大なるあやまちもなく、取押へたり。まことにあやふき事のかぎりなりき。船よりあがりて後、彼男尙いかりて梶取を手打にもすべしとかまへしを、年老たる船頭いろ〳〵と詫誤りて、無難に事すませり。余などがごとき旅の身、若し手疵にてもかふむらば、誠に思ひがけなき災なるに、無難なりしは天幸といふべし。

# 西遊記續篇卷之五　大尾

正編は寛政七年卯三月刻
續編は寛政十年午六月刻

賣花村裏
賣花去
觀月臺邊
觀月回
金粉今朝
消爍盡
秋光春色
爲誰開
伏見懷古
梅華偃史





明治卅二年八月十九日印刷
仝　卅二年八月廿九日發行

著述者　故　橘南谿

標註兼發行者　平出鏗二郎
東京市本郷區本郷四丁目廿九番地

印刷者　中村政吉
東京市京橋區三十間堀三丁目

印刷所　報文社
右同所

正價金四十八錢

發兌元

東京市本郷區湯島切通坂町八番地　南江堂書店
（電話本局一三三〇）
仝　淺草區北清島町七十九番地　松崎蒼虬堂
（電話浪花二〇三六）

187
55

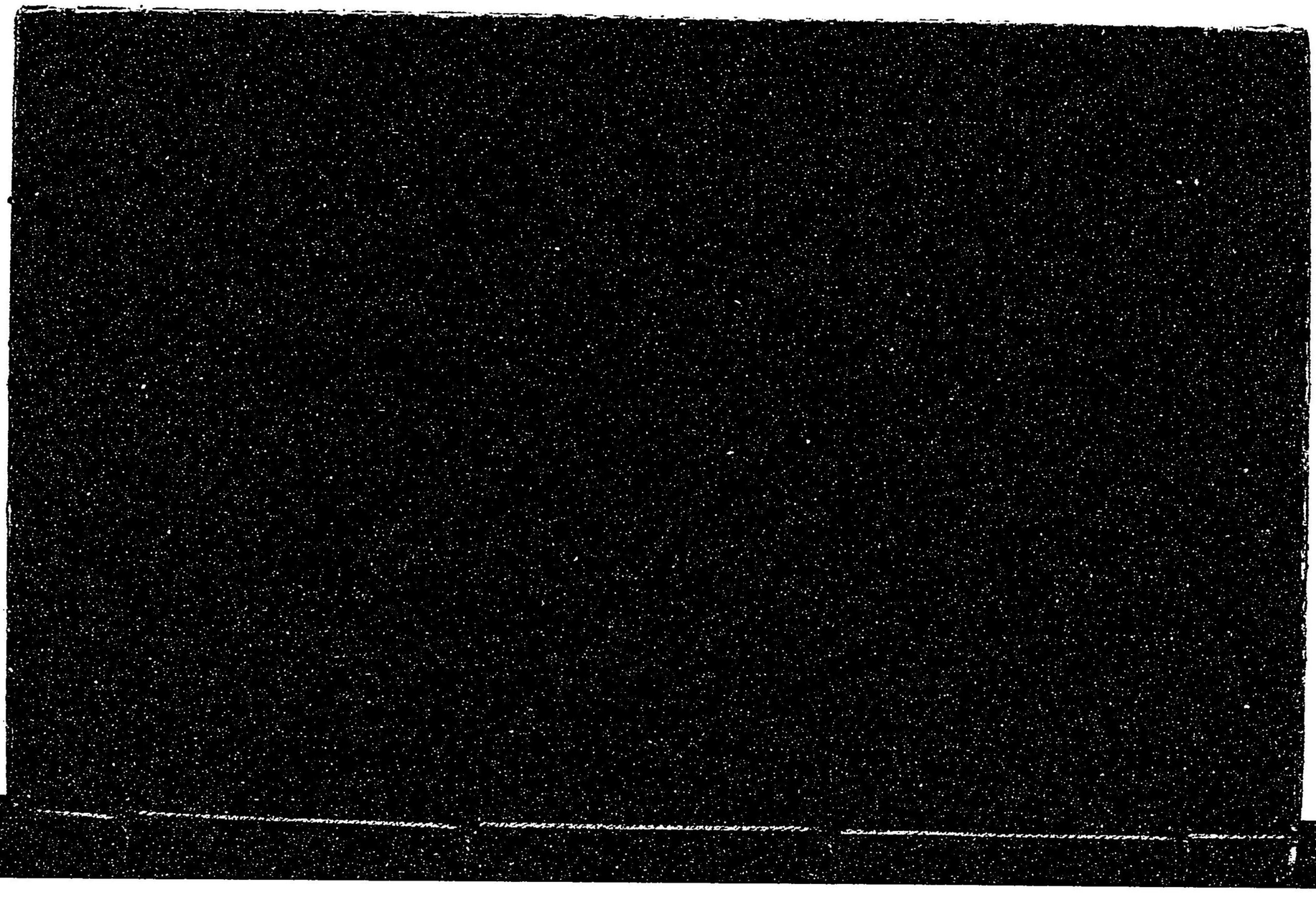
故橘南谿著述
平出鏗二郎標註

# ○標註東西遊記 東遊記 東遊記後編 下册

不日出版

賣捌書肆

東京市日本橋區通三丁目　丸善書店
東京市本郷區龍岡町　吐鳳堂書店
大坂市南區心齋橋筋壹丁目　松村九兵衛
岡山市石關町　渡邊千代治
熊本市新町二丁目　長崎次郎
名古屋市京町壹丁目　野崎覺次郎
長崎市引地町　安中朋次郎
富山市四十物町　中田書店
羽前國鶴岡五日町　小池藤治郎

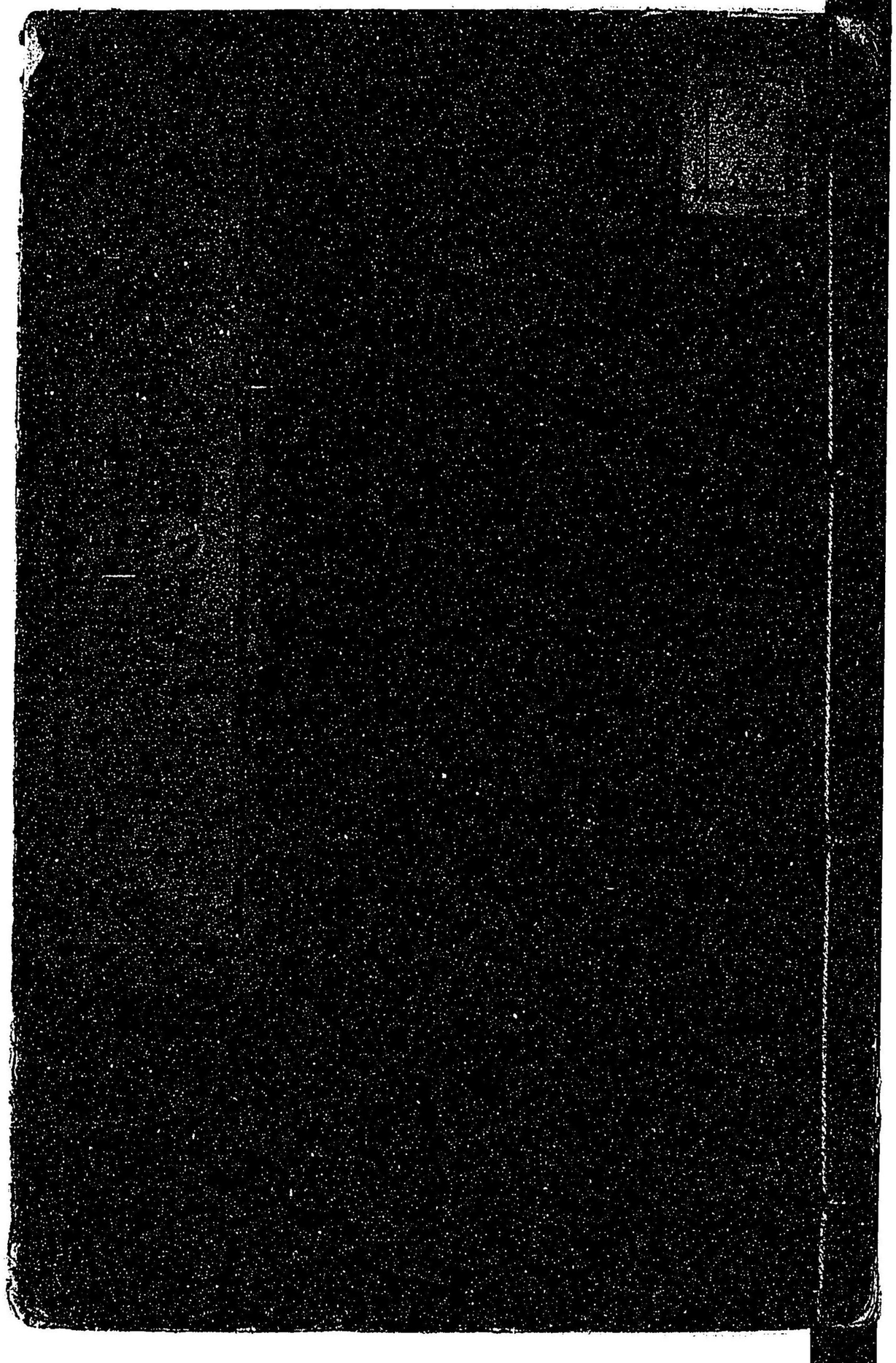


022716-000-9

187-55

# 東西遊記（標註）　上冊

橘　南谿／著

M32

ADB-0499